

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

**平成 23 年度～平成 27 年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究成果報告書概要**

1 学校法人名 立教学院 2 大学名 立教大学

3 研究組織名 現代心理学部附属心理芸術人文学研究所

4 プロジェクト所在地 埼玉県新座市北野 1-2-26

5 研究プロジェクト名 新しい映像環境をめぐる映像生態学研究の基盤形成

6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
芳賀 繁	現代心理学研究科	教授

8 プロジェクト参加研究者数 31 名

9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
【学内】			
芳賀 繁 ☆	現代心理学研究科・教授	映像の感性的・人間工学的評価, 安全教育プログラムの産業組織心理学的評価 *	チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究チーム 新しい映像技術・技法・表現が人間に及ぼす様々な効果を測定して, 心理的效果が高く, かつ心身への悪影響が少ない技法・表現法の条件を探ることにより, 本プロジェクトの実験心理学的, 人間工学的, 映像情報メディア学的側面に寄与する。また, 研究成果に基づく映像コンテンツを制作することにより, 他の研究チームに実験・調査材料を提供する。 * 芳賀はチーム2の映像体験の教育的評価も担当するとともに, 本プロジェクト全体の統括を行う。
佐藤 一彦	現代心理学研究科・教授	映像コンテンツの制作・表現技法の研究	
小口 孝司	現代心理学研究科・教授	映像の感性的評価	
日高 聡太	現代心理学研究科・准教授	映像の知覚的・人間工学的評価	
石山 智弘	現代心理学部・助教	映像コンテンツの制作・表現技法の研究	
鈴木 清重	現代心理学部附属心理芸術人文学研究所・研究員	映像コンテンツの制作・表現技法の研究	
大石 幸二 ☆	現代心理学研究科・教授	芸術・表現心理療法の効果に関する定量的評価	

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

			新しい映像技術・技法・表現がもたらす映像体験とその過程を解明し、芸術・表現心理療法による精神的健康の増進や、安全教育プログラムの開発に関する有効な知見を得ることにより、本プロジェクトの臨床心理学・産業組織心理学的側面の充実に寄与する。
中村 秀之 ☆	現代心理学研究科・教授	新しい映像技術による映画芸術・映像環境の拡張の歴史的哲学的研究	チーム3:新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究チーム 新しい映像技術・技法・表現が映画芸術における表現・体験をいかに拡張してきたかを分析し、新しい映像表現を実践的に探究することにより、本プロジェクトの映画学的側面に寄与する。
前田 英樹	現代心理学研究科・教授	新しい映像技術による映画芸術・映像環境の拡張の歴史的哲学的研究	
万田 邦敏	現代心理学研究科・教授	新しい映像技術による映画芸術・映像環境の拡張の実践的研究	
篠崎 誠	現代心理学研究科・教授	新しい映像技術による映画芸術・映像環境の拡張の実践的研究	
松田 正隆 ☆	現代心理学研究科・教授	映像と身体に関する舞台芸術表現の立場からの研究	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム 新しい映像技術・技法・表現を「身体とイメージ」という問題の中に位置づけて、身体哲学、精神医学、舞台芸術表現の立場から検討し、新しい映像体験の創造・受容をうながすことにより、本プロジェクトの身体哲学的側面に寄与する。
香山 リカ	現代心理学研究科・教授	映像と身体に関する精神医学の立場からの研究	
田崎 英明	現代心理学研究科・教授	映像と身体に関する身体哲学の立場からの研究	
加藤 千恵	現代心理学研究科・教授	映像と身体に関する身体哲学の立場からの研究	
江川 隆男	現代心理学研究科・教授	映像と身体に関する身体哲学の立場からの研究	
日高 優	現代心理学研究科・准教授	映像と身体に関する身体哲学の立場からの研究	
高山 明	現代心理学研究科・特任准教授	映像と身体に関する舞台芸術表現の立場からの研究	
チョン・ヨンドウ	現代心理学研究科・特任准教授	映像と身体に関する舞台芸術表現の立場からの研究	
宇野 邦一	立教大学・名誉教授	映像と身体に関する身体哲学・身体表現の立場からの研究	

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

(共同研究機関等) 【学外】			
池田 華子	国立障害者リハビリテーションセンター研究所脳機能系障害研究部発達障害研究室・流動研究員	映像の知覚的・人間工学的評価	チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究チーム
谷田部 智之	株式会社三菱総合研究所情報技術研究センター・主任研究員	映像コンテンツの制作と技術的分析	
中内 麻美	かわさきさくら児童家庭支援センター・心理職	芸術・表現心理療法の効果に関する定量的評価	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム
遠藤 愛	星美学園短期大学幼児保育学科・専任講師	芸術・表現心理療法における体験内容と意味づけの分析	
太田 研	星美学園短期大学幼児保育学科・専任講師	芸術・表現心理療法における体験内容と意味づけの分析	
渡邊 孝継	埼玉県本庄市発達教育支援センター・就学支援アドバイザー, 共立女子大学・非常勤講師, 埼玉大学・兼任講師	芸術・表現心理療法における体験内容と意味づけの分析	
白井 郁男	東日本旅客鉄道株式会社研究開発センター安全研究所・主幹研究員	安全教育プログラムの開発と評価	
島崎 敢	国立研究開発法人防災科学技術研究所・特別研究員	安全教育プログラムの開発と評価	
筒井 武文	東京藝術大学大学院映像研究科映画専攻・教授	新しい映像技術による映画芸術・映像環境の拡張の実践的研究	チーム3:新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究チーム
細馬 宏通	滋賀県立大学人間文化学部・教授	新しい映像技術による映画芸術・映像環境の拡張の歴史的哲学的研究	
ヴィクトル・ニジェリスコイ	モスクワテレビラジオ大学 Ostankino 身体表現教師, 芸術空間・演劇レストラン”Stepa Lihodeev” 演出家	映像と身体に関する舞台芸術表現の立場からの研究	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

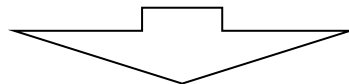
旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
映像の知覚的・人間工学的評価	現代心理学部 ・助教	日高 聡太	チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究チーム

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

映像と身体の関係に関する舞台芸術表現の立場からの研究	現代心理学研究科 ・教授	勅使川原 三郎	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム
----------------------------	-----------------	---------	-------------------------------------

(変更の時期:平成 24 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
現代心理学部・助教	現代心理学研究科 ・准教授	日高 聡太	チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究チーム
現代心理学研究科・教授	現代心理学研究科 ・特任教授	勅使川原 三郎	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム

新

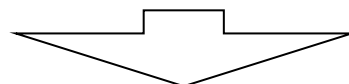
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	現代心理学研究科・教授	松田 正隆	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム
	現代心理学部・助教	石山 智弘	チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究チーム
	深谷市立教育研究所・主任学校福祉相談員	中内 麻美	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム

(追加の時期:平成 24 年 4 月 1 日)

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
芸術・表現心理療法における体験内容と意味づけの分析	現代心理学研究科 ・教授	神田 久男	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム
芸術・表現心理療法における体験内容と意味づけの効果に関する生理的指標を用いた評価	現代心理学研究科 ・教授	鍋田 恭孝	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム

(変更の時期:平成 25 年 3 月 31 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
現代心理学研究科・教授		神田 久男	当初の研究計画における役

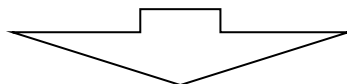
法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

			務を完遂したため、辞退。
現代心理学研究科・教授		鍋田 恭孝	当初の研究計画における役務を完遂したため、辞退。

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
安全教育プログラムの開発と評価	東日本旅客鉄道株式会社 研究開発センター安全研究所・課長(安全グループリーダー)	山本 邦倫	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム 氏の所属先である東日本旅客鉄道株式会社内の人事異動の為、小野寺氏と交代。

(変更の時期:平成 25 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	東日本旅客鉄道株式会社 研究開発センター安全研究所・主幹研究員	小野寺 理	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム

新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	星美学園短期大学・ 幼児保育学科・専任講師	遠藤 愛	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム
	星美学園短期大学・ 幼児保育学科・専任講師	太田 研	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム

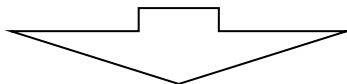
(追加の時期:平成 25 年 4 月 1 日)

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
芸術・表現心理療法の効果に関する定量的評価	深谷市立教育研究所・ 主任学校福祉相談員	中内 麻美	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム
映像と身体の関係に関する舞台芸術表現の立場からの研究	現代心理学部・ 助教	ヴィクトル・ ニジェリスコイ	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

(変更の時期:平成 25 年 4 月 1 日)



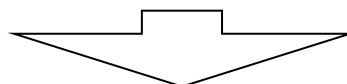
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
深谷市立教育研究所・主任学校福祉相談員	かわさきさくら児童家庭支援センター・心理職	中内 麻美	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム
現代心理学部・助教	モスクワテレビラジオ大学 Ostankino・身体表現教師, 芸術空間・演劇レストラン”Stepa Lihodeev” 演出家	ヴィクトル・ニジェリスコイ	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
映像と身体の関係に関する舞台芸術表現の立場からの研究	現代心理学研究科・特任教授	勅使川原 三郎	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム

(変更の時期:平成 26 年 3 月 31 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
現代心理学研究科・特任教授		勅使川原 三郎	当初の研究計画における役務を完遂したため, 辞退。

新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	埼玉県本庄市発達教育支援センター・就学支援アドバイザー	渡邊 孝継	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム
	現代心理学研究科・教授	江川 隆男	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム
	現代心理学研究科・准教授	日高 優	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム
	現代心理学研究科・特任准教授	高山 明	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム
	現代心理学研究科・特任准教授	チョン・ヨンドウ	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

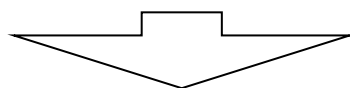
			容に関する研究チーム
--	--	--	------------

(追加の時期:平成 26 年 4 月 1 日)

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
映像コンテンツの制作・表現技法の研究	現代心理学部・助教	鈴木 清重	チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究チーム
映像と身体の関係に関する身体哲学・身体表現の立場からの研究	現代心理学研究科・教授	宇野 邦一	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム
芸術・表現心理療法における体験内容と意味づけの分析	埼玉県本庄市発達教育支援センター・就学支援アドバイザー	渡邊 孝継	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム

(変更の時期:平成 26 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
現代心理学部・助教	現代心理学部附属心理芸術人文学研究所・研究員	鈴木 清重	チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究チーム
現代心理学研究科・教授	現代心理学部附属心理芸術人文学研究所・研究員	宇野 邦一	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム
埼玉県本庄市発達教育支援センター・就学支援アドバイザー	埼玉県本庄市発達教育支援センター・就学支援アドバイザー、共立女子大学・非常勤講師	渡邊 孝継	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム

新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	早稲田大学人間科学部・助教	島崎 敢	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム

(追加の時期:平成 26 年 6 月 1 日)

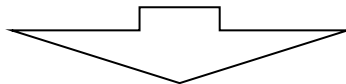
旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
安全教育プログラムの開発と評価	東日本旅客鉄道株式会社研究開発センター安全研究所・主幹研究員	小野寺 理	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム 氏の所属先である東日本旅

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

			客鉄道株式会社内の人事異動の為、白井氏と交代。
--	--	--	-------------------------

(変更の時期:平成 26 年 6 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	東日本旅客鉄道株式会社 研究開発センター安全研究所・主幹研究員	白井 郁男	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム

新

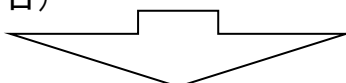
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	国立障害者リハビリテーションセンター研究所脳機能系障害研究部発達障害研究室・流動研究員	池田 華子	チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究チーム

(追加の時期:平成 27 年 4 月 1 日)

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
芸術・表現心理療法における体験内容と意味づけの分析	埼玉県本庄市発達教育支援センター・就学支援アドバイザー, 共立女子大学・非常勤講師	渡邊 孝継	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム
安全教育プログラムの開発と評価	早稲田大学人間科学部・助教	島崎 敢	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム
映像と身体の関係に関する身体哲学の立場からの研究	現代心理学研究科・准教授	加藤 千恵	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム
映像と身体の関係に関する身体哲学・身体表現の立場からの研究	現代心理学部附属心理芸術人文学研究所・研究員	宇野 邦一	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム

(変更の時期:平成 27 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
埼玉県本庄市発達教育支援センター・就学支援アドバイザー, 共立女子大学・非常勤講師	埼玉県本庄市発達教育支援センター・就学支援アドバイザー, 共立女子大学・非常勤講師, 埼玉大学・兼任講師	渡邊 孝継	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

早稲田大学人間科学部・助教	国立研究開発法人防災科学技術研究所・特別研究員	島崎 敢	チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チーム
現代心理学研究科・准教授	現代心理学研究科・教授	加藤 千恵	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム
現代心理学部付属心理芸術人文学研究所・研究員	立教大学・名誉教授	宇野 邦一	チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム

11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

■目的: 今日、映像技術は急速な勢いで革新が続いている。超高精細映像(4K)や三次元映像(3D)の制作技術の進歩、インターネットを通じた映像の通信・配信技術の発展、大画面テレビ受像機や3Dテレビの家庭への普及、個人用・業務用の各種モバイル機器の進化などによって、私たちの周りに新しいタイプの映像があふれるようになった。また、誰もが簡単に使えるようになったデジタルカメラ、ビデオカメラ、3Dカメラなどに、誰もが簡単に投稿できるインターネット動画サイトや、携帯電話での映像のやり取りが相まって、映像の制作者(送り手)と鑑賞者(受け手)の境界はあいまいなものとなった。この状況の中で、映像を制作する技法や、映像を使った表現にも次々と新しいものが出現している。しかし、このような新しい映像環境を送り手としてあるいは受け手として体験することにもなう身体的・心理的影響は、その効果や意味も含めて未解明である。もしも、新しい映像体験がもたらす有形無形のインパクトをとらえ、その効果を高め、人間の心身や社会関係に及ぼすリスクを軽減できるなら、それは映像技法・表現ひいては映像環境の望ましい発展を牽引することにつながるであろう。本プロジェクトは、映像の制作者(送り手)、鑑賞者(受け手)、体験者、表現者としての人間と、それを取り巻く映像環境を「映像生態系」ととらえ、その様々な側面を研究する学問たる「映像生態学」の研究基盤を形成する試みを行うものである。

■意義: 新しい映像環境が持つ有形無形のインパクトおよび潜在的リスクが学術的・実践的に解明され、問題解決が図られるとともに、新しい映像技法・表現の方向性が明らかとなる。この研究基盤の上に、映像環境と人間の関わりについての幅広い研究と応用が促進され、産学連携や研究者間交流の拠点が形成される。

■計画の概要: 研究の1年目は主に予備調査、予備実験、資料収集にあてる。映像制作機材を購入し、撮影、編集に習熟する過程を含む。2～4年目はチームごとに研究を推進するとともに、チーム間の交流、意見交換を行う。チーム1は映像が人間に及ぼす効果を測定することにより、心理的効果が高く、かつ心身への悪影響が少ない技法・表現法の条件を探る。チーム2は新しい映像技術・技法・表現がもたらす体験とその過程を解明し、精神的健康の増進や安全教育プログラムの開発に資する知見を得る。チーム3は新しい映像技術・技法・表現が映画芸術における表現・体験をいかに拡張してきたかを分析し、新しい映像表現を探究する。チーム4は映像技術・技法・表現を「身体とイメージ」という問題の中に位置づけて新しい映像体験の創造・受容を促す。5年目に4チームの知見を統合して、新しい映像環境と人間の関わりについての幅広い研究成果を論文、ガイドライン、映像コンテンツ、舞台上演、シンポジウム等の形で発表する。

(2) 研究組織

立教大学現代心理学部付属機関である心理芸術人文学研究所を本プロジェクトの推進組織として位置づける。本プロジェクトは、人間およびそれを取り巻く映像環境に密接に関わる専門領域から4つのチームを編成し、各チームの専門性を活かした効率的かつ多角的な検討を行う。(研究参加 31名)

チーム1(チームリーダー芳賀)は実験心理学、人間工学、映像情報メディア学、映像制作の立場から新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究を、チーム2(チームリーダー大石)は臨床心理学、産業組織心理学の立場から新しい映像環境がもたらす体験の臨床的・教育的評価に関する研究を、チーム3(チームリーダー中村)は映画学、映画制作の立場から新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究を、チーム4(チームリーダー松田)は身体哲学、精神医学、舞台芸術表現の立場から新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究を行う。プロジェクトは研究代表者である芳賀が統括し、全てのメンバはチームの枠を超えて協働、交流、意見交換を行う。また、研究を円滑に遂行するため、ポストドクトラル・フェロー(PD)を1名、ならびに大学院生リサーチアシスタント(RA)を1名、教育研究コーディネータを1名、アルバイトを1～10名雇用している。また、各研究

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

チームの進捗状況を的確に把握し、相互調整を図るとともに、2ヶ月に1回程度のチームリーダー会議を開いて各チームからの研究進捗報告とその報告に基づいたチーム間の連絡調整を行う。このチームリーダー会議には研究活動を支援する大学の事務部局のメンバも同席し、様々な実務上のアドバイスを行う。

(3) 研究施設・設備等

研究施設・設備の詳細は、「17 施設・装置・設備の整備状況」を参照のこと。
新座キャンパス6号館、新座キャンパススタジオ棟の設備を活用し研究を行っている。

(4) 研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

【平成 23 年度】

チーム1: 新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究

(1) 三次元映像制作装置一式を購入し、4K および 3D の技術を用いた試験動画像作品の撮影・編集を行い(* I M-10, 11, 12, 13)、三次元動画像内での奥行き感や被写体同士の距離感、被写体の動きや質感の変化が基本的な画像生成や観察者の知覚にどのような影響を与えるかの基礎的分析を行った。(* I P-5)

(2) 映像身体学科で制作された既存の映像作品、新たに制作した映像コンテンツ、商業映画等の中から心理実験に用いるコンテンツを選定した。(* I M-10, 11, 13)

(3) 映像の心理的影響を測定するための心理尺度を開発し、心電図、脈波、フリッカー値、唾液アマラーゼ等の生理的計測と共に用いて、3D 映画、3D ゲームの視聴/プレイが心身に及ぼす影響を評価する実験を行った。実験により、映像コンテンツと視聴環境の物理的要因によって映像体験がどのように変容するかの評価方法について基礎的分析ができた。(* I P-25)

以上により、このチームは平成 23 年度の研究計画を概ね達成した。

チーム2: 新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究

(1) 映像体験の臨床的評価をめざす研究側面では、描画療法(動的家族画)の制作過程の内省報告を情動反応・運動反応・言語反応の3側面から分析することを試みた。そして、得られた内省報告の分析視点を導き出す過程を展望論文にまとめた。(* II P-12)

(2) 映像体験の教育的応用をめざす研究側面では、ヒューマンエラーの疑似体験を駆使して安全教育を行うための研究の枠組みを展望し、分析視点を抽出するための事前検討を行った。

以上により、このチームは第1年次研究の所期の目的を達成した。

チーム3: 新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究

(1) 2度の研究会(うち1度はゲストを招いた公開研究会)を開催して、外部講師の問題提起なども受けて、過去の映画作家たちが3D などの技術革新に対応して、2次元画面の表現の刷新をどのように行なってきたかに関する理論的枠組みと歴史的パースペクティブを設定し、今後の作業スケジュールを策定した。

(2) 映画制作を目標とする実践系を A、論文執筆を目標とする理論系を B として、2つのサブ・チームに分け、平成 24 年度以降は相互に議論を重ねつつも相対的に独自の活動を進めていくことを確認した。

(3) 研究に必要な映像資料および制作のための機材を購入した。

(4) 3年目の平成 25 年度に予定している海外での可燃性フィルムの観覧について、関係機関への予備的な調査を行った。

以上により、第1年次研究の計画のうち、文献資料の購入と先行研究の整理については必ずしも十分ではなかったが、それ以外は当初の目的をほぼ達成した。

チーム4: 新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究

(1) 「映像生態学」として、映像が現代社会を生きる人間の知覚、思考、「生態」にどのようにかわるか、イタリアの哲学者の講演会を行い、討議する中で、本プロジェクトにおける哲学的探求の出発点とすることができた。(資料 23 参照)

(2) 認知科学や現代哲学の成果に照らして身体、知覚のあり方を考えながら米国でダンス・パフォーマンスを行っているアーティストを招き、映像生態学の問題とダンスがどのように出会うか、その実例を見た。これからも今後の研究活動を組み立てていく上で貴重なヒントをえた。(資料 22 参照)

以上を通して研究の基本的方向を定めることができ、計画通りの成果を達成した。

プロジェクト全体

2ヶ月に1回程度開催したチームリーダー会議に、チームリーダーだけでなく、一部のプロジェクト研究

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

員、教育研究コーディネータ、研究活動を支援する大学の事務部門も出席して、研究の途中経過と予定を話し合った。また、年度末にチーム1～4の研究成果報告会を行い、1年目の進捗状況と得られた知見を共有するとともに、次年度以降の方向性を全員で議論した。その結果、各チームが当初の予定以上の成果をあげていることを確認するとともに、平成 24 年度も計画通りに研究を推進することに決定した。(資料 20,21 参照)

【平成 24 年度】

チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究

(1) 小型 4K カメラおよび 4K ハイスピードカメラによるさまざまな対象の撮影と編集の試行を行った。
(* I E-12, I M-6, 7, 8) また、通常の 2D で撮影された映像を、専用の装置を使って電氣的に 3D 映像に変換する実験を行った結果、あらかじめ、構図上奥行き感を感じる 2D 映像であれば、より 3D の立体感を疑似的に強化できることなどが判明した。(* I E-13)

(2) 金環日食を 2 台のハイビジョンビデオカメラで撮影し、「月に叢雲の現象」と、ローゼンバッハ現象にみられる図と地の層化現象が、日食時の太陽と雲の間にも知覚されることを確認した。(* I M-4)

(3) 大画面 TV による商業映画作品鑑賞に関して、映像の次元と照明環境が心身に及ぼす影響を評価した。さらに、三次元映像コンテンツを一般的な TV サイズ画面で視聴する際の疲労感を、主観的な指標と客観的な指標を組み合わせて検証した。

(4) 新たな動画映像を使用した心理学的実験室実験の結果、主観的な臨場感評価と映像に対する印象評定は空間解像度の異なる映像に対して異なる特徴を記述することが分かった。また空間解像度の異なる映像に対する観視者の映像の見方の違いが眼球運動情報によって評価できる可能性を明らかにした。

以上により、当初計画で予定した心理次元マップの作成には至らなかったが、それ以外の内容については研究計画以上の成果を達成した。

チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究

(1) 映像体験の臨床的評価をめざす研究側面では、描画療法(動的学校画)の効果と制作過程の定量的評価に取り組み、描画を制作した子どもの対人反応について分類・整理し実証研究論文にまとめた。(* II P-6, 10, 11)

(2) 映像体験の教育的応用をめざす研究側面では、安全教育を行うための分析視点をもとに、映像コンテンツを用いた研修の効果と負の影響を評価する手法を確立することと、研修実施条件を検討することを目的として研究を進めた。また、映像コンテンツに 3D などの最新映像技術を活用するための技術的問題を精査した。

以上により、このチームは第2年次研究の所期の目的を達成した。

チーム3:新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究

(1) チーム3全体の活動として前年度と同様にゲスト講師を招いて帝政ロシア時代の映画監督に関する公開研究会を開催し、併せて貴重な参考作品を上映した(1回)。講師の研究発表と問題提起を受けて全体討論をおこない、画面の深さを活かした演出というチームの主題をいっそう深く追求した。それによって、チーム3A(制作実践)とチーム3B(理論研究)の間で問題・関心の共有を強固なものにした。この公開研究会は、今年度の計画における映像資料の分析、特に画面分析という課題を遂行するものであり、同時に新たな表現の可能性を追求するための短篇劇映画の制作準備の一環として過去の作品を研究するという点で有意義だった。

(2) チーム3B のメンバの研究成果(ヒッチコック監督の空間表現に関する論文)を映像身体学専攻の紀要に投稿し、匿名査読者の審査を通過して掲載された。(* III P-3)

(3) チーム3A のメンバがコーディネータを務めた討議を開催し、その記録を上記の映像身体学専攻紀要に発表した。(* III D-3) 上記の論文と討議は、平成 24 年度の計画にある「空間と身体の関係に焦点を当ててカメラワーク、ミザンセーヌ(演出)、モンタージュについて詳細な画面分析を行う」という課題に取り組んだ事例研究である。

(4) チームの研究用資料として、冊子『映画の奥行きにかんする研究 注釈付文献リスト』を作成した。平成 23 年度内には十分に達成できなかった「文献資料の整理」の成果である。(* III D-2)

以上により、第2年次の目的はおおむね達成できたと言える。

チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究

(1) 本研究にとって基礎理論となり、また追求の対象となりうるジル・ドゥルーズの知覚論、映像の思考について哲学研究者6人とともに6時間にわたってシンポジウムを開催し、認識を深めた。(資料 17 参照)

(2) 舞踏ダンサー・ジョスリーヌ・モンプティ氏を招いて舞踏『病める舞姫』の上演を行い、アーティスト

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

の観点から生まれる思考について認識を深めた。(* IV B-5) (資料 19 参照)

(3) 先端的な示唆を与え得る生態心理学者である佐々木正人氏を招き、講演会と対話を行い、映像生態学的な研究方向に照らして、理論的基盤を獲得した。(* IV B-5) (資料 18 参照)

以上、「身体とイメージ」に関する哲学的研究、社会思想的研究に特に重点をおき、映像生態学的な研究方向に照らして仮説的なアプローチを進め、重要な参照対象となりうる生態心理学についても一定の展望を獲得した。当初の計画以上の達成度である。

プロジェクト全体

平成 24 年度も前年度に引き続き2ヶ月に1回程度の頻度でチームリーダ会議を開き、そこに一部のプロジェクト研究員、教育研究コーディネータ、研究活動を支援する大学の事務部門も出席して、研究の途中経過と予定を話し合った。また、平成 25 年4月にプロジェクト全体の平成 24 年度研究成果報告会を行い、2年目までの進捗状況と得られた知見を共有するとともに、多数参加した学部学生、大学院生にも2カ年間の研究成果を分かりやすく説明し、制作した映像コンテンツを披露した。(資料 15,16 参照)

【平成 25 年度】

チーム1: 新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究

平成 24 年度に引き続き映像の物理的特性と心理的体験の関係を実験心理学的手法により検討するとともに、3D/4K 映像を含む各種映像視聴の心理・生理的負担の人間工学的評価を進めた。なお、技術開発動向の変化により、当初予定していた 2D/3D 変換に関する研究から超高精細 4K 映像を研究対象の中心に据えた。主な研究成果は以下のとおりである。

(1) 物理的・主観的に解像度/画質の異なる映像の観視時に、映像観視環境や映像の物理的特性が映像の見えと感性的印象にどのように影響を及ぼすかを、自作の動画を用いて検討した。その結果、映像の解像度/画質(4K・HD)ごとに、また映像の持つ物理的な特性(映像の画角・動きの量)に依存して、評価や快適さに関わる印象と迫力や活動に関する感性的な印象が変化することが示された。さらに、4K映像から作成したHD映像(d4K映像)においても、感性印象がより高まることが示された。(* I P-3, I C-13)これらの知見より、当初想定をしていた単純な心理次元マップでは人の映像に対する心理的反応を記述することは不可能であり、より詳細な複数の物理的・心理的要因の検討を通じて、最適な映像体験を導く要因を探索的に検討する必要があることが新たに分かった。

(2) 映像を視聴することによるストレス低減効果を見た。その際に 4K 映像、HD 映像、「音声のみ」の3群に分けてストレスの低減効果を計測した。その結果、「音声のみ」群が最もストレス効果が高いことが明らかになった。

(3) 3D 映画を映画館のような暗い室内でスクリーン視聴する条件と、明るい室内でテレビ(液晶ディスプレイ)視聴する条件を主観的疲労、臨場感、心拍率で比較する実験を実施し、「映画館条件」でより高い臨場感が得られ、心拍率も上昇することが示された。

以上、新しい映像環境がもたらす心理的影響を評価するという目標に向かって着実に研究が進捗した。

チーム2: 新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究

(1) 映像体験の臨床的評価をめざす研究側面では、描画療法(動的学校画)の直接体験および間接体験において効果が現れるメカニズムの解明に取り組み、第1年次に仮定したモデルの検証を行い実証研究論文にまとめた。

(2) 映像体験の教育的応用をめざす研究側面では、鉄道会社と連携をとりながら、どのような映像コンテンツによる研修が有効か効果評価を行った。

以上により、このチームは第3年次研究の所期の目的を達成した。

チーム3: 新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究

予定していた海外での可燃性フィルムの作品の調査について、関係機関に照会したところ、欧米でも、安全面の理由から可燃性フィルムを上映できなくなっていることが判明し、映像調査の対象を国内の所蔵作品に変更することに伴い、次年度から開始する予定だった映画制作の開始を今年度に前倒した。

(1) チーム全体では、東京国立近代美術館フィルムセンターにおける映像資料調査・分析を実施した。先行研究の整理を踏まえて、映画史上の時期を限定した集中的な実地調査によって、過去の劇映画作品の奥行き表現について知見を深めた。

(2) チーム3A(制作実践)は、研究計画にふさわしいプロデューサーを選定し、予定していた短篇ではなく本格的な長編映画「SHARING」を制作した。(* III F-3)

(3) チーム3B(理論研究)は、映像哲学の文献を中心に映画の空間に関する研究を進めた。

以上より、研究計画の一部を変更したが、プロジェクト全体の観点から見ると着実かつ有意義に研

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

究を進めることができた。

チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究

(1) 6月に公開講演会と対話:「マギー・マランと現代ダンスの冒険」を行い、現在ダンスの世界で何が起きているのか、現代フランスのダンサーたちの問題意識の認識を深めた。(資料 14 参照)その後、それがどのような反応や認識を与え得るかについて研究を進めた。7月に公開上演会&トーク『音響ドラマ』という舞台作品の上演を行い、「聴覚体験の新たな発見」をテーマとして、上演に伴う空間、視覚をも考慮にいれ、聴覚体験の新たな発見とその作用への思考を深めた。(資料 13 参照)

(2) 「身体とイメージ」に関する研究の理論的基盤に照らし合わせ、芸術的実践の問いに重点を置き研究を進め、国内外の注目すべき研究者:ローラ・U・マークス氏、ブライアン・マズミ氏、ペーターニバル・ペルバル氏、ジョルジョ・パセローネ氏、表現者:河合政之氏、諏訪敦彦氏、田中泯氏を招き、国際的シンポジウム『知覚のプラトー』を開催した(資料 12 参照)、またこの成果を公刊行物にまとめる準備を行った。

以上より、チーム4は第3年次の研究目的を達成した。

プロジェクト全体

年度内に数次にわたって行われたチームリーダ会議等を通じて、「映像生態学」の有効性と限界を確認したうえ、平成 26 年度初頭にチーム1~4のすべてが参加する公開講演会を開催し、これまでの研究に不足している点と、今後の発展可能性について議論を行った。(資料 10,11 参照)

以上により、プロジェクト全体として平成 25 年度の研究目標を達成した。

【平成 26 年度】

チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究

(1) 実験で用いる映像素材として新たに 4K や HD で撮影を行うとともに、その撮影された映像を観察実験に用いるため、ファイル形式の変換・調整や映像提示時間の長さを最適化するための映像編集を行った。この映像を用いて行った一連の実験の結果、映像の解像度は観視者の主観的印象に影響を及ぼし、かつ異なる撮像対象では影響の強さも変化すること(* I P-7, I C-5)、高フレームレートを用いることで低フレームレート時に見られた 4K 動画における評価や快適性の低減が抑制可能であることなどが明らかになった。

(2) 4K 超高精細映像の撮影実験を行い、被写体が起こす乱反射による色ムラを防ぐこと、照明器具そのものが持つ色温度とカメラ側の色温度設定とを正確にマッチングをさせることなどによって、被写体の色の再現性を高い確度で実現するためのノウハウを得た。さらに、「4K 感の質的強化」の編集実験を行い、データ変換時の圧縮による劣化を回避するワークフローを構築することなどにより編集作業プロセスを改善することを通して、元データが備えているオリジナルな 4K 感を完成段階まで維持することができた。

(3) 家庭用の 40 型 4K/3D テレビを用いて 3D 映像の臨場感、没入感を脳波の事象関連電位で測定する実験を行った結果、P300 振幅について、逸脱刺激において 3D の方が 2D より有意に減衰するという結果となった。このことは、3D が映像をより面白く目を引くものにする可能性を示唆するものである。

以上の結果、強力な知覚体験や、臨場感、没入感といった高次元感性印象を引き起こす映像の条件、それに伴う心的負荷が明らかになり、平成 26 年度の研究計画をおおむね達成した。

チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究

(1) 映像体験の臨床的評価をめざす研究側面では、描画療法を含む芸術・表現心理療法における体験内容と意味づけの効果を検討する基盤として「能動的触知覚」に関する総説を公表した>(* II P-7) また、身体性に着目した描画解釈の他覚的・定量的評価として「視線追尾装置を用いた視知覚特徴」に関する原著論文を公表した>(* II P-10) さらに、精神的健康に関する提言を行うために「自閉症の自他認識の境界」に関する3編の研究論文を公表した>(* II P-5, 8, 9)

(2) 映像体験の教育的応用をめざす研究側面では、鉄道運転士用安全教育の iPad 用アプリケーションのプロトタイプを完成し、実用化に向けたプログラム評価に着手し、その成果の一部を公表した>(* II C-1, 2)

以上により、このチームは第4年次研究の所期の目的を達成した。

チーム3:新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究

(1) 昨年度、施設工事などの理由で予定していた回数を実施できなかった東京国立近代美術館フィルムセンターにおける映像資料調査を実施した。ビデオや DVD で視聴できない日本映画4本を観覧し、議論を行なった。

(2) 公開講演会「ヒッチコック映画の空間と精神——ロメール & シャブロール『ヒッチコック』をうけて」を

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

開催した(資料8参照)。専門家のゲストを招き、ヒッチコック映画の「形式」の問題について、チームのメンバーと共に実践的な演出の視点、映画史的観点から再検討を行い、その現代的意義を明らかにした。(* III D-1)

(3) チーム3A(制作実践)は、長編映画「自由なファンシイ」を制作し、主人公の心の内面を、空間で巧みに表現した。(* III F-2)

(4) チーム3B(理論研究)の活動として、身体哲学の知見と映像文化史における研究成果を踏まえて、映画固有の空間-身体表象の問題について学会発表を行ない、論文を発表した。(* III P-2)

以上により、第4年次も目的はおおむね達成できた。

チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究

「身体とイメージ」の問題にかかわるパフォーマンス作品の創作を視野に入れ、4月にチームメンバーで「テレサ・ハッキオン・チャ著作『Dictée』を巡って」という研究会を開催し、研究課題や哲学的概念の確認を行った。その経緯の発展として、公開ワークショップとシンポジウムの第一部においてワークショップ「アルバイトマッピング～労働を考える」(資料9参照)を行い、劇場という「身体」を考えた。第二部のディスカッションでは3年間の研究成果を検証し、新しい映像環境における思考と表現の創出を探究した。

以上により、チーム4は最終年度に創作するパフォーマンス作品における足掛りとなる第4年次目の研究目的を遂行できた。

プロジェクト全体

次年度に開催する4つのチーム合同による本プロジェクトの研究成果報告会と最終報告書作成に向けた準備を開始した。具体的には、各チームの最終的な研究目標を平成27年のできるだけ早い段階に達成すること、その結果を集約して公表し、公開で議論する複数の場を平成27年6月に設定することをチームリーダー会議において決定した。さらに、その公開講演会の企画について話し合いを進めた。

以上により、プロジェクト全体としても所期の事業計画を達成した。

【平成27年度】

チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究

物理的情報の効果を最大限に引き出すと同時に、心的負荷を適正な範囲にとどめるための、映像技法の制作上・使用上の留意点をこれまでの研究知見にもとづいて整理した。主なものとしては、(1) あらかじめ構図上奥行きを感じる2D映像であれば、電氣的に3Dに変換した場合に立体感を強化できる、(2) 大型ディスプレイでの3D映像の最適観視距離は画面高の3.9倍である、(3) 視差1度以上の過度な奥行き情報を持つ動画は深刻な疲労感を与える、(4) 運動量の多い動画は4Kよりもダウンコンバート4K映像(4Kで撮影したものをHDに変換した映像)の方が観視者の評価が高く快適性も優れている、(5) 撮影画角が広い場合や自然風景を被写体にした映像において4Kやダウンコンバート4K映像はHDよりも高い効果が得られる、(6) 映像観視の影響を調べるには、主観的尺度の他、疲労の計測にはフリッカー値、注意の計測には脳波の事象関連電位、ストレスの計測には脳波による計測が有効である。

これらに基づいて、4K等の新たな映像環境を創成・体験するためのガイドラインとなる指針を取り出すことができた。

以上により、最終年度における研究目的を遂行できた。

チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究

チーム2は、新しい映像表現を知覚した人間に生じる体験とその過程を説明するモデルを提案することを目的とした。これまでの研究成果をふまえ、新しい映像表現との接触やその使用にともなう身体的・心理的影響についてまとめ、精神的健康の増進と安全教育プログラムの開発への提言を行った。

(1) 映像体験の臨床的評価をめざす研究側面では、「身体的自己拡張感」が身体的・心理的影響に関連すると考えられ、その基盤に触知覚と身体像の存在があることを指摘した。また、「能動的触知覚」が事物・事象を動的に理解する要因となっていることを示唆し、今後の芸術・表現心理療法がこれらの要因を取り扱う必要があると結論づけた。(* II P-1, 3, 4)

(2) 映像体験の教育的応用をめざす研究側面では、映像を用いた安全教育教材を開発する際に、現場管理者層と綿密な打ち合わせをして現場の教育ニーズを把握すること、現場で実際に作業をする人を開発チームに入れること、映像を実際の作業現場で撮影して教育内容にリアリティを持たせることが重要である点が明らかになった。また、コンテンツにエンターテインメント性を持たせて現場作業者が自発的に参加意欲を高め、タブレット端末のようなモバイル性の高い機材を用いることで安全教育プログラムの実効性を高め得ることを明らかにした。

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

以上により、このチームは最終年度における研究目的を遂行し、所期の成果を達成することができた。

チーム3:新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究

チーム3全体のこれまでの制作実践と理論研究を踏まえ、3Dなどの技術革新によって変容する現代の映像環境において、映画における2次元画面の奥行き表現が今なお豊かな意義と可能性を持つことを指摘し、今後の映像制作や鑑賞教育に資する成果をまとめた。

(1) チーム3A(制作実践)は、長編劇映画「SYNCHRONIZER」を制作し、人間の心と心の関係を奥行きと平面を活用した身体的配置の変化によって表現する演出を刷新した。(※Ⅲ F-1)

(2) チーム3A(制作実践)の研究創作の交流を踏まえて、海外のゲスト講師を招いて「映像における空間と身体」をテーマとした公開パネルディスカッションを6月に2回開催した。(資料5参照)

(3) チーム3A(制作実践)の研究創作の交流を踏まえて、国内の映画作家をゲスト講師として招き、映画と演劇、身体と演技、映画の中の空間と時間表現などを議論する連続公開シンポジウム「3.11以後の映像表現」を2月から3月にわたり3回開催した。(資料2参照)

(4) チーム3B(理論研究)は、昨年度のヒッチコックに関する公開講演会での発表をもとに、ヒッチコック映画の空間と精神の関係に関する新しい知見を提示し、2次元映画における奥行き表現の意義を再評価する論文を発表した。(※Ⅲ P-1)

以上により、最終年度における研究目的を遂行できた。

チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究

(1) 4年にわたる研究成果を検証する為、6月に外部有識者と公開パネルディスカッション「映像の中の身体—ダンスと映画」を行って、映像生態学の研究基盤の上で活性化される様々な研究の形や、将来的応用の姿を議論した。特に、ダンスを踊る身体を映像表現で提示することの可能性を模索することを目的に、第一部では映像に撮られたダンサーの身体がどのように舞台表現と違うのか、2人の若いダンサーを登場人物とした濱口竜介監督の映画作品『不気味なもの肌に触れる』の鑑賞と批評を通して検討し、第二部では濱口監督によるダンサー(砂連尾理氏)のダンスを映像化した短篇映画の創作過程の解説、ダンスを映像化する場合の知覚の可能性等の議論を行った。(資料4参照)

(2) シンポジウム等講演会で集積してきた研究成果を十分に生かし、新しい映像環境の創出に寄与し得る思考と表現とは何かを探求しながら、「身体とイメージ」の問題について意識革新をうながす映像表現とパフォーマンスによる3作品を、演劇祭「Dialog/Dance/Diary 身体とイメージをめぐる演劇祭 in 立教」として12月に公開した。(資料3参照)

以上により、チーム4は最終年度における研究目的を遂行できた。

プロジェクト全体

6月6日に4チーム合同による本プロジェクトの研究成果報告会を公開で開催する(資料6参照)とともに、そのビデオ記録をインターネット上のコンテンツとして公表した。さらに、6月7日と13日の2日にわたって、「映像における空間と身体」というテーマで公開パネルディスカッション(資料5参照)を、6月27日に「映像の中の身体—ダンスと映画—」と題する公開パネルディスカッション(資料4参照)を開催して、映像・映画と身体の関係について映画作家やダンサーを交えて議論した。

平成28年3月に平成27年度研究成果報告会を公開で行い、各チームの最終年度の活動と成果を報告するとともに、5年間のチーム間交流の総括的議論を行った。また、この報告会では、博物館、美術館、映画館、劇場あるいはコンサートホールなどの施設を新しい映像技術を利用して、従来とは大きく異なる方法で融合させる可能性や、病院や公共施設、広告ディスプレイなどの都市環境のあり方を変える表現とそのインパクトに関する構想的な見通しが発表された。年度末にこれら一連の成果をまとめた報告書を公表した。(資料1参照)

【研究期間全体をとおして】

本研究を通じて、人間とそれを取り巻く新しい映像環境が持つ様々な有形無形のインパクトおよび潜在的风险が学術的・実践的に解明され、問題解決が図られるとともに、新しい映像技術・技法・表現の方向性が明らかとなった。加えて、様々な映像作品、実験的映画、演劇作品が制作され各方面から高い評価を得た。この研究基盤の上に、映像環境と人間の関わりについての様々な研究が促進され、映像技術・技法・表現、芸術、社会的応用の発展を牽引することになる。その結果、質の高い疑似体験を生み出す装置、コンテンツ、超高精細映像(4K)や三次元映像(3D)を含む次世代映像情報メディアが創出され、直接体験できない事象(事故、災害など)への予防的な取組みが喚起される。また、工学的な技術革新や商業ベースのシステム開発に対して人間工学の観点からのガイドラインや示唆を与えるであろう。

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

<優れた成果が上がった点>

チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究

○ 佐藤一彦を中心とする映像制作チームは東京六大学野球の試合、丸の内の夜景等を 3D で撮影し、完成度の高いコンテンツを制作し、心理的効果の高い制作技法の確立に貢献した。(* I M-10, 13)また、これまで 4K 規格での高速度撮影は行われてこなかったが、新たに開発された 4K でのハイスピードカメラを調達し、1秒間に 240 フレームでの撮影を実験した。馬が障害物を越える瞬間のようすを 4K ハイスピードという空間解像度、時間解像度がともにきわめて高いレベルでの映像の撮影に成功し、その映像を使用して、心理的効果の評価を行った。(* I E-12)

○ 鈴木清重は金環日食を 2 台のハイビジョンビデオカメラで撮影し、「月に叢雲の現象」と、ローゼンバウハ現象にみられる図と地の層化現象が、日食時の太陽と雲の間にも知覚されることを確認した。これは新しい映像技術が知覚心理学研究に貢献した貴重な成果である。(* I M-4, I C-14, 18)

○ 鈴木清重は制作者と鑑賞者の相互作用としての「映像体験」の記述を目的とした実験的研究、および映像制作実務と映像教育のフィールドワークに基づき、映像と映像環境の概念を精緻化する理論的研究を行った。映像生態学の観点から、映像をモノではなくコトと捉える基礎研究と応用研究の重要性を提言した。(* I P-1, 2)

○ 芳賀繁は人間工学的アプローチにより、大型ディスプレイ(65型)における 2D および 3D 映像の最適観視距離が、画面高の約 3.9 倍であることを明らかにした。

○ 芳賀繁は 3D 映像を見ることが 2D 映像を見るよりも著しく負担になる個人が一部に存在することをフリッカー融合値を計測することで明らかにした。また、行為者の視点で撮影した一人称映像の方が三人称映像に比べて強い注意を引くことを脳波の事象関連電位を用いて実証することに成功した。

○ 日高聡太と池田華子は実験心理学的手法を用いて、異なる空間解像度をもつ動画が観視者の主観的な感性印象を変化させようことを見だし、また空間解像度の異なる映像に対する観視者の映像の見方の違いが眼球運動情報によって評価できる可能性を明らかにした。

○ 日高聡太と池田華子は評価や快適さ、迫力に関わる印象は画質の高い方が印象が強くなることを示した。また、物理的な画質(4K)だけではなく、主観的な画質(ダウンコンバート 4K)が高い場面でも同様の傾向があることが示された。

○ 日高聡太、佐藤一彦、石山智弘、池田華子は、独自に被写体の種類を操作した独自の映像を用いた実験を行い、様々な対象、色彩を含んだ自然画像を提示したときにこそ、高精細映像(4K)の評価が高まることを見いだした。

○ 佐藤一彦と石山智弘は、4K超高精細映像の撮影と編集における手法の応用と開発において、浮世絵の木版複製版のように静止する被写体の「色の再現性」を、ITU-R(国際電気通信連合)が策定する高色域規格 B.T.2020 と HDR(ハイダイナミックレンジ)の高階調性という双方にのっとなって映示させる撮影・編集・再生・映示の一連の手法的実験をおこない実現した。

チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究

○ 動きを表す描画(動的家族画・動的学校画)、幼児の描画・描出行為、自閉症児の顔表情識別、能動触知覚や身体運動認知などに関わる研究成果が 12 編の学術論文(このうち9編が査読有)として既に公表、または採択され公表予定である。そして、これらはいずれも新しい映像体験の臨床心理学への応用例として重要な知見を提供している。(* II P-1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12)

○ 鉄道運転士用安全教育のタブレット端末用アプリケーションの開発とその実用化を手がけ、また実際のコンテンツには実際性とリアリティを持たせる工夫を施し、さらに教育上の動機づけを高めるためにエンターテインメント性を具えるなど画期的なプログラム開発を行った。(* II C-1, 2)このプログラムをインストールしたタブレット端末を鉄道の現場において、20 名の運転士に試行してもらったところ極めて好意的な評価を得た。この研究・実践活動を通して、新しい映像表現の安全教育・教育心理学への応用に関する示唆に富む知見を蓄積した。

チーム3:新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究

チーム3は、3Dなどの技術革新が進む現代において、映画における伝統的な2次元の空間演出、特に「奥行き」表現に注目することが、作品の分析や制作に対して発見的・創造的な価値を有することを実践的かつ理論的に示した。

○ 中村秀之「『裏窓』再訪——その再帰的な観客性の批判に向けて」。映画史上に名高く、映画研究においても膨大な議論が積み重ねられてきたアルフレッド・ヒッチコック監督の『裏窓』(1954)を、奥行きの演出という観点から再考することで、この作品の特異な演出と「観客性」(spectatorship)を解明する有力な手がかりを提示した。(* III P-3)

○ 万田邦敏、西山洋市、大工原正樹「『J・エドガー』という謎なき謎——イーストウッドと映画の現在」。近年、革新的な問題作を次々と発表しているクリント・イーストウッド監督の作品『J・エドガー』(2011)について、3 人の映画監督が徹底的に討議した。実在の権力者の生涯と歴史を題材としながら空間や時間の奥行きを消す周到な演出によって、この作品が物語映画の先端的な実験をおこなっ

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

ていることを明らかにした。(* III D-3)

○ 筒井武文, 万田邦敏, 篠崎誠, 木村建哉, 中村秀之「ヒッチコック映画の空間と精神——ロメール & シャブロール『ヒッチコック』をうけて」。ロメールとシャブロールが提起したヒッチコック映画の「形式」の問題について, 実作者=批評家である筒井, 万田, 篠崎が実践的な演出の視点から, また研究者の木村が映画史的観点から再検討を行ない, その現代的意義を明らかにした。(* III D-1)

○ 篠崎誠監督『SHARING』。311の震災の記憶を現在の日常においてどのように受けとめるべきかという深刻な問題を, 画面の深さと表層との自在な戯れによって映像化した。過去の実験的な手法を現代のアクチュアルな問題に取り組む表現として甦らせるなど, 本プロジェクトにおける「奥行き」を創造的な手がかりとした作品である。本作品は, 国内外の映画祭(2014年釜山国際映画祭やバンクーバー国際映画祭, TOKYO FILMeX(東京)等)に招待され, 上映された。(* III F-3)

○ 筒井武文監督『自由なファンシィ』。若い女性の不安定で捉えがたい内面を, 空間の奥に潜む謎として巧みに視覚化した。視覚的な空間表現によって不可視な心の問題を思考することへと見る者を誘う不思議なテイストの作品である。篠崎作品とはまったく異なる方法によってではあるが, 「奥行き」を課題とすることで, 映画史の豊かな伝統を踏まえた新たな表現の可能性を提示した作品である。

(* III F-2)

○ 中村秀之「映画の全体と無限——ドゥルーズ『シネマ』とリュミエール映画」。ジル・ドゥルーズの映像哲学的研究と映画史における初期映画研究の比較検討によって, 固定カメラによる単一画面, すなわち編集を欠くことでときに「映画」と見なされないリュミエール映画が, その奥行き表現によって独自の精神性を持つことを指摘した。奥行きという観点を映画の哲学的考察と歴史の実証が交錯する場所に導入することで, 技術革新がもたらす感覚の変容とは異なる映像の精神的次元を提示した。

(* III P-2)

○ 万田邦敏『SYNCHRONIZER』。人間の心と心の関係, 特に倒錯的欲望にとらわれた人物の逸脱的行動による危機的関係を, 奥行きと平面の差異を活用した身体的配置の変化によって劇的に表現することで, 映画の空間演出の可能性を拡大した。(* III F-1)

○ 中村秀之「ヒッチコック的 3D ——『裏窓』(1954)と『めまい』(1958)における接触と情動」。前年度のヒッチコックに関する公開講演会での発表を発展させ, ヒッチコック映画の空間と精神の関係に関して, 従来論じられてきたような視覚性よりも触覚性の問題が優位にあるという新しい知見を提示し, 2次元映画における奥行き表現の意義を再評価する論文を発表した。(* III P-1)

チーム4: 新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究

○ 「身体とイメージ」に関する原理的考察となる著作を刊行した。(* IV B-9)これに発想を得て開催した講演会の成果に基づき, 新たな理論の先駆けとなる『知覚のエコソフィー——生態心理学とダンスからの提言』と題するブックレットを刊行した。(* IV B-5)さらに国際シンポジウムを開催し, 論集としてまとめ, 刊行した。(* IV B-1)

○ 身体表現と映像表現の可能性を問う三つのパフォーマンス作品を中心とした演劇祭「Dialog/Dance/Dialy 身体とイメージをめぐる演劇祭 in 立教」を行い(資料3参照), 演劇における現前する身体と映像の中の身体との差異を確認し, イメージが身体に及ぼす影響と新たな知覚の可能性を提示した。

<課題となった点>

特に問題なし。

<自己評価の実施結果と対応状況>

2ヶ月に1回程度の頻度でチームリーダ会議を開き, 各チームの研究進捗状況や予算執行状況を相互にチェックした。この会議には研究活動を支援する大学の事務部局のメンバも同席した。

年度末, または翌年度初めに学外研究者や学部学生・大学院生にも開かれたプロジェクト全体の研究報告会を開催し, 研究成果と問題点, 今後の課題等を議論した。

3年次の研究進捗状況報告と5年次の研究成果報告書については, 大学の部長会に報告しチェックを受けた。

<外部(第三者)評価の実施結果と対応状況>

本プロジェクトは研究期間中定期的に外部評価を受ける態勢をとらなかったが, 毎年数多く開催した公開講演会に登壇してもらった外部の研究者や, 講演会の参加者から常に有意義な評価と建設的な助言を得て, 研究の方向性に必要な修正を加えつつプロジェクトを進めてきた。また, 平成 27 年度には, 各チームの 5 年間の研究活動を総括して評価していただく目的でそれぞれ分野の第一線で活躍している有識者に外部評価を依頼した。チーム1は吉井勇氏(『ニューメディア』編集長), チーム2は須藤邦彦氏(山口大学教育学部専任講師), チーム3は木下千花氏(首都大学東京人文科学研究科准教授), チーム4は森山直人氏(京都造形芸術大学舞台芸術学科教授)である。総じて, この 5 年

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

間のプロジェクト活動を独創的で有意義なもの高い評価をいただいた。今後の方向性についても示唆に富んだコメントをいただいたので、プロジェクト終了後の研究活動に活かしたい。

<研究期間終了後の展望>

現代心理学部附属心理芸術人文学研究所の研究テーマとして本研究を継続・発展させるプロジェクトの構想を検討中である。また、本プロジェクトを通して形成された映像制作技術、映画制作技法、舞台芸術表現、実験心理学、臨床心理学、教育心理学の各専門家のネットワークは、映像生態学の研究基盤として新たな発想を育み、本プロジェクトで整備された研究機材と相まって、他の私立大学では類を見ない先端的かつ独創的な研究成果を創出することになると確信している。

<研究成果の副次的効果>

チーム1では、本プロジェクト研究で確立しつつあるコンテンツ制作手法を応用して、平成28年度に実用放送が予定されている「4Kテレビ放送」向けの番組制作を計画している。特に次世代型4Kテレビの色表示の規格とされる高色域が特長のITU-R BT.2020方式での色表示とHDR(ハイダイナミックレンジ)と呼ばれるハイコントラストの規格を伴った映像クリップの撮影実験を通して、新規規格の番組の制作を準備・予定している。

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 三次元映像 (2) 超高精細映像 (3) 実験心理学
 (4) 哲学 (5) フィルム・スタディーズ (6) 身体表現
 (7) イメージ (8) _____

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

I. チーム1:新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究チーム

<雑誌論文>

著者名	論文タイトル			
* I P-1 鈴木清重	映像環境の「モンタージュ」と「ゲシュタルト」			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
心理学研究:Psychology 2015 2015年度活動成果報告書(桑沢デザイン研究所デザイン学分野心理学研究ゼミナール(編))	無	通巻 8	2016年	pp.18-19.

著者名	論文タイトル			
* I P-2 鈴木清重	映像体験の記述と理論構築に関する実験心理学的研究—映像環境の「モンタージュ」と「ゲシュタルト」			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Image arts and Sciences 日本映像学会報	無	172	2015年	pp.22.

著者名	論文タイトル			
* I P-3 池田華子, 田中智明, 日高聡太, 石山智弘, 宮崎弦太	超高精細映像とハイビジョン映像から生じる感性的印象の比較.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
日本感性工学会論文誌	有	第14巻 3号	2015年	pp.369-379.

著者名	論文タイトル			
I P-4 川久保惇, 吉岡明里, 小口孝司	自然環境の映像と音がストレス低減に及ぼす影響.			

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
立教大学心理学研究	有	第 57 号	2015 年	pp.11-20.

著者名	論文標題			
* I P-5 日高聡太, 池田華子, 石山智弘	3次元映像と2次元映像観察時に生じる疲労感の違い—主観的・客観的指標を用いた検討—			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
立教大学心理学研究	有	第 57 号	2015 年	pp.1-10.

著者名	論文標題			
I P-6 鈴木清重	「できごと」をつくるアート／時系列のデザイン			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
心理学研究:Psychology 2014 2014 年度活動成果報告書(桑沢デザイン研究所デザイン学分野心理学研究ゼミナール(編))	無	1/1	2014 年	pp.20-29.

著者名	論文標題			
* I P-7 池田華子, 田中智明, 日高聡太, 石山智弘, 宮崎弦太	映像の解像度および撮像対象の違いが動画像観視時の主観的印象に及ぼす影響.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
電子情報通信学会技術研究報告. HIP, ヒューマン情報処理	無	第 114 巻 347	2014 年	pp.1-6.

著者名	論文標題			
I P-8 稲葉緑, 小野寺理, 武田祐一, 楠神健, 芳賀繁	思い込みエラー体験型学習プログラムの開発—鉄道社員を対象としたヒューマンエラー教育プログラム—			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
人間工学 特別号(日本人間工学会 第 55 回大会講演集)	無	第 50 巻 supplement	2014 年	pp.200-201.

著者名	論文標題			
I P-9 Takeda, H., Momose, H., & Oguchi, T.	Effects of tour preferences and images of similar scenery on stress recovery.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Proceedings of 2013 TOSOK International Tourism Conference.	有	CD-Rom1	2013 年	pp.10.

著者名	論文標題			
I P-10 Teramoto, W., Kobayashi, M., Hidaka, S. and Sugita, Y.	Vision contingent auditory pitch aftereffects.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Experimental Brain Research.	有	229	2013 年	pp.97-102.

著者名	論文標題			
I P-11 Ide, M., and Hidaka, S.	Visual presentation of hand image modulates visuo-tactile temporal order judgment.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Experimental Brain Research.	有	228	2013 年	pp.43-50.

著者名	論文標題			
I P-12 Takahashi, J., Hidaka, S., Teramoto, W., and Gyoba, J.	Temporal characteristics of the effects of visual pattern redundancy on encoding and storage processes: Evidence from rapid serial visual presentation.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Psychological Research.	有	77	2013 年	pp.687-697.

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

著者名	論文標題			
I P-13 Hidaka, S., Teramoto, W., Keetels, M., and Vroomen, J.	Effect of pitch-space correspondence on sound-induced visual motion perception.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Experimental Brain Research	有	231	2013 年	pp.117-126.

著者名	論文標題			
I P-14 Ide, M., and Hidaka, S.	Tactile stimulation can suppress visual perception.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Scientific Reports.	有	3	2013 年	3453.

著者名	論文標題			
I P-15 Honda, A., Shibata, H., Hidaka, S., Gyoba, J., Iwaya, Y., and Suzuki, Y.	Effects of head movement and proprioceptive feedback in training of sound localization.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
iPerception, (Special issue: Multisensory perception)	有	4(4)	2013 年	pp.253-264.

著者名	論文標題			
I P-16 Hidaka, S., and Nagai, M.	Illusory motion and mislocalization of temporally offset target in apparent motion display.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Frontiers in Consciousness Research (Special issue: Awareness shaping or shaped by prediction and postdiction)	有	4	2013 年	196.

著者名	論文標題			
I P-17 Ikeda, H., Watanabe, K., & Cavanagh, P.	Crowding of biological motion stimuli.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Journal of Vision	有	13(4):20	2013 年	pp.1-6.

著者名	論文標題			
I P-18 佐藤一彦	「4K映像」が「視る力」を深化させる			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
月刊・視聴覚教育	無	2013 年 1月号	2013 年	pp.2-3.

著者名	論文標題			
I P-19 鈴木清重	心理学の手法と時間のデザイン			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
心理学研究:Psychology 2012 2012 年度活動成果報告書(桑沢デザイン研究所デザイン学分野心理学研究ゼミナール(編))	無	1/1	2013 年	pp.32-35.

著者名	論文標題			
I P-20 Ikeda, H., Fukui, T., Tagai, K., Takata, S., & Watanabe, K.	Politeness Perception in Action: Subjective Impression of Handing Actions by Professional Sales Persons.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Proceedings of the International Conference on Kansei Engineering and Emotion Research KEER 2012.	有	—	2012 年	pp.210-215.

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

著者名	論文標題			
I P-21 Kobayashi, M., Teramoto, W., Hidaka, S., and Sugita, Y.	Sound frequency and aural selectivity in sound-contingent visual motion aftereffect.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
PLoS ONE	有	7(5)	2012 年	e36803.

著者名	論文標題			
I P-22 Kobayashi, M., Teramoto, W., Hidaka, S., and Sugita, Y.	Indiscriminable sounds determine the direction of visual motion.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Scientific Reports	有	2	2012 年	365.

著者名	論文標題			
I P-23 Hidaka, S., Shibata, H., Kurihara, M., Tanaka, A., Konno, A., Maruyama, S., Gyoba, J., Hagiwara, H., and Koizumi, M.	Effect of second language exposure on brain activity for language processing among preschoolers.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Neuroscience Research	有	73	2012 年	pp.73-79.

著者名	論文標題			
I P-24 Hidaka, S., Teramoto, W., and Nagai, M.	Sound can enhance the suppression of visual target detection in apparent motion trajectory.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Vision Research	有	59	2012 年	pp.25-33.

著者名	論文標題			
* I P-25 芳賀 繁, 高橋広樹, 増田康祐	三次元映像を見る負担・疲労の計測:フリッカー値, 心拍変動指標, 唾液アミラーゼ, 主観的評価尺度を用いた評価の可能性			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
人間工学	無	Vol.48, 特別号(日本人間工学会第53回大会講演集)	2012 年	pp.296-297.

著者名	論文標題			
I P-26 Hidaka, S., Nagai, M., Sekuler, A.B., Bennett, P.J., and Gyoba, J.	Inhibition of target detection in apparent motion trajectory.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Journal of Vision	有	11(10):21	2012 年	pp.1-12.

著者名	論文標題			
I P-27 Teramoto, W., Hidaka, S., Sugita, Y., Sakamoto, S., Gyoba, J., Iwaya, Y., and Suzuki, Y.	Sounds can alter the perceived direction of a moving visual object.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
Journal of Vision	有	12(3):11	2012 年	pp.5-33.

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

著者名	論文標題			
I P-28 Hidaka, S., Teramoto, W., Kobayashi, M., and Sugita, Y.	Sound-contingent visual motion aftereffect.			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
BMC neuroscience	有	12(44)	2011年	pp.1-6.

<図書>

著者名	出版社		
I B-1 大山 正, 鷺見成正(著・DVD制作), 五十嵐賢紘(DVD制作), 鈴木清重(映像制作・素材提供)	新曜社		
書名	発行年	総ページ数	
「見てわかる視覚心理学」	2014年	148	

著者名	出版社		
I B-2 中島義明(編), 日高聡太	朝倉書店		
書名	発行年	総ページ数	
第2章「感覚・知覚心理学」・第6節「神経生理学的理論」 in 現代心理学「事例」事典	2012年	384	

著者名	出版社		
I B-3 原田悦子, 篠原一光(編), 日本認知心理学会 監修, 芳賀 繁	北大路書房		
書名	発行年	総ページ数	
第7章:注意・安全とメンタルワークロード in 現代の認知心理学4巻『注意と安全』	2011年	304	

<学会発表>

発表者名	発表標題	
I C-1 鈴木清重	知覚心理学に基づく心理学的「表現論」の可能性	
学会名	開催地	発表年月
東北大学心理学研究室・日本基礎心理学会共催 第49回知覚コロキウム	東北大学, 仙台市(宮城県)	2016年3月

発表者名	発表標題	
I C-2 鈴木清重	おべんとう絵本の事象知覚に関する事例研究 (2)	
学会名	開催地	発表年月
日本アニメーション学会第17回大会	横浜国立大学, 横浜市(神奈川県)	2015年6月

発表者名	発表標題	
I C-3 鈴木清重	映像体験の記述と理論構築に関する実験心理学的研究—映像環境の「モンタージュ」と「ゲシュタルト」	
学会名	開催地	発表年月
日本映像学会第41回大会	京都造形芸術大学, 京都市(京都府)	2015年5月

発表者名	発表標題	
I C-4 鈴木清重	おべんとう絵本の事象知覚に関する実験的研究	
学会名	開催地	発表年月
日本基礎心理学会第33回大会	首都大学東京, 八王子市(東京都)	2014年12月

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

発表者名	発表標題	
* I C-5 池田華子, 田中智明, 日高聡太, 石山智弘, 宮崎弦太	映像の解像度および撮像対象の違いが動画像観視時の主観的印象に及ぼす影響	
学会名	開催地	発表年月
電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会	東北大学, 仙台市(宮城県)	2014年12月

発表者名	発表標題	
I C-6 川久保惇, 小口孝司	3D映像視聴による疲労に対する探索的検討	
学会名	開催地	発表年月
日本心理学会	札幌コンベンションセンター, 札幌市(北海道)	2014年9月

発表者名	発表標題	
I C-7 鈴木清重	4K2D方式と4K3D方式で提示した実写動画像の鑑賞体験に関する実験的研究	
学会名	開催地	発表年月
日本心理学会第78回大会	同志社大学, 京都市(京都府)	2014年9月

発表者名	発表標題	
I C-8 川久保惇, 笠原亮多朗, 小口孝司	自然環境の映像と音がストレス低減に及ぼす影響	
学会名	開催地	発表年月
日本心理学会大会発表論文集, 78, 378.	同志社大学, 京都市(京都府)	2014年9月

発表者名	発表標題	
I C-9 MASUDA, K., SEKINE, Y., SATO, H., and HAGA, S.	Laboratory Experiment on Visual and Auditory Inattention of Pedestrians Using Cell Phones (Oral presentation).	
学会名	開催地	発表年月
The 28 th International Congress of Applied Psychology: ICAP2014.	Paris, France.	2014, July.

発表者名	発表標題	
I C-10 鈴木清重	おべんとう絵本の事象知覚に関する事例研究	
学会名	開催地	発表年月
日本アニメーション学会第16回大会	東京工芸大学, 中野区(東京都)	2014年6月

発表者名	発表標題	
I C-11 増田康祐, 関根由莉, 佐藤秀香, 芳賀繁	歩行中の携帯電話使用が注意と歩行に及ぼす影響(2)歩行の安定性とメンタルワークロードの計測	
学会名	開催地	発表年月
日本人間工学会第55回大会講演	神戸国際会議場, 神戸市(兵庫県)	2014年6月

発表者名	発表標題	
I C-12 増田康祐, 関根由莉, 佐藤秀香, 芳賀繁	歩行中の携帯電話使用が注意と歩行に及ぼす影響(1)ボタン式とタッチパネル式入力の比較	
学会名	開催地	発表年月
日本人間工学会第55回大会講演	神戸国際会議場, 神戸市(兵庫県)	2014年6月

発表者名	発表標題	
* I C-13 池田華子, 田中智明, 日高聡	超高精細映像に対する感性的印象評価	

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

太, 石山智弘, 宮崎弦太		
学会名	開催地	発表年月
第 9 回感性工学会春季大会	北海道大学, 札幌市(北海道)	2014 年 3 月

発表者名	発表標題	
* I C-14 Suzuki, K., Sugano, L., & Masuda, N.	Annular Solar Eclipse illusion: Observing the Rosenbach phenomenon in the natural world?	
学会名	開催地	発表年月
Poster session presented at 36th European Conference on Visual Perception	Bremen, Germany.	2013, August.

発表者名	発表標題	
I C-15 日高聡太	「音によって生じる視覚運動知覚」	
学会名	開催地	発表年月
日本認知心理学会第 11 回大会	つくば国際会議場, つくば市(茨城県)	2013 年 6 月

発表者名	発表標題	
I C-16 鈴木清重	「落語の身体表現技法に関する映像心理学的研究」	
学会名	開催地	発表年月
日本アニメーション学会第 15 回大会	日本大学芸術学部江古田校舎, 練馬区(東京都)	2013 年 6 月

発表者名	発表標題	
I C-17 鈴木清重	「動画像系列に知覚される事象の同一性に関する映像心理学的研究—市川崑監督の演出した TVCM シリーズの視聴体験より」	
学会名	開催地	発表年月
日本映像学会第 39 回大会	東京造形大学, 八王子市(東京都)	2013 年 6 月

発表者名	発表標題	
* I C-18 鈴木清重	「金環日食を撮影した動画像のみえ方に関する考察」	
学会名	開催地	発表年月
第 46 回知覚コロキウム デモセッション	明星大学, 青梅市(東京都)	2013 年 3 月

発表者名	発表標題	
I C-19 Hidaka, S., Teramoto, W., Keetels, M., & Vroomen, J..	Up-down but not high-low sounds drive visual motion perception.	
学会名	開催地	発表年月
53rd Annual Meeting of Psychonomic Society	Minnesota, U.S.A.	2012, November.

発表者名	発表標題	
I C-20 池田華子, 渡邊克巳, Patrick Cavanagh.	「バイオリジカルモーションの歩行方向判断におけるクラウディングの影響」	
学会名	開催地	発表年月
日本基礎心理学会第 31 回大会	九州大学, 福岡市(福岡県)	2012 年 11 月

発表者名	発表標題	
I C-21 日高聡太, 寺本渉, Mirjam Keetels, Jean Vroomen.	「聴覚誘導性視覚運動知覚における感覚間対応づけの影響」	

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

学会名	開催地	発表年月
日本基礎心理学会第 31 回大会	九州大学, 福岡市(福岡県)	2012 年 11 月

発表者名	発表標題		
I C-22 井手正和, 日高聡太	「手画像の提示が視触覚間の時間順序判断に及ぼす影響」		
学会名	開催地	発表年月	
日本基礎心理学会第 31 回大会	九州大学, 福岡市(福岡県)	2012 年 11 月	

発表者名	発表標題		
I C-23 日高聡太, 寺本渉, 小林まおり, 杉田陽一	「音随伴性視覚運動知覚」		
学会名	開催地	発表年月	
日本心理学会第 76 回大会	専修大学, 川崎市(神奈川県)	2012 年 9 月	

発表者名	発表標題		
I C-24 Ikeda, H., Watanabe, K., & Cavanagh, P.	Influence of crowding on discriminating the direction of biological motion		
学会名	開催地	発表年月	
European Conference on Visual Perception	Alghero, Italy.	2012, September.	

発表者名	発表標題		
I C-25 鈴木清重	「アニメーションと実写動画の境界を考察する動画作品の供覧(作品発表)」		
学会名	開催地	発表年月	
日本アニメーション学会第 14 回大会	東海大学, 札幌市(北海道)	2012 年 7 月	

発表者名	発表標題		
I C-26 日高聡太	「こころで感じる動き」		
学会名	開催地	発表年月	
日本時間学会 第4回大会	立教大学, 新座市(埼玉県)	2012 年 6 月	

発表者名	発表標題		
I C-27 Ikeda, H., Fukui, T., Tagai, K., Takata, S., & Watanabe, K.	Politeness Perception in Action: Subjective Impression of Handing Actions by Professional Sales Persons.		
学会名	開催地	発表年月	
International Conference on Kansei Engineering and Emotion Research	Penghu, TAIWAN.	2012, May.	

II. チーム2:新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究チー

ム

<雑誌論文>

著者名	論文標題			
* II P-1 大石幸二, 澤邊嵩介	動的学校画(KSD)における有資格心理士による活動の知覚			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
人間関係学研究	有	第 20 巻 第 2 号	2016 年	(in press)

著者名	論文標題			
* II P-2 渡邊孝継, 須藤邦彦, 大石幸二	自閉症スペクトラム障害児における表情を含む複数の刺激の弁別訓練—条件性弁別の枠組みに基づくポーカーゲームを通して			

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

雑誌名	二 レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
臨床発達心理実践研究	有	第 20 巻 第 2 号	2016 年	(in press)

著者名	論文標題			
* II P-3 太田研, 遠藤愛, 大石幸二	能動的触知覚活動による幼児の身体イメージの促進—人物画の分析を通して—			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
星美学園短期大学研究論叢	無	第 48 巻	2016 年	(in press)

著者名	論文標題			
* II P-4 太田研, 遠藤愛, 大石幸二	幼児の能動的触知覚活動による身体イメージの形成—描画における人物画の質的変容—			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
日伊総合研究所報	無	第 12 巻	2016 年	(in press)

著者名	論文標題			
* II P-5 渡邊孝継, 須藤邦彦, 大石幸二	広汎性発達障害児における聞き手の視覚と聴覚における情報処理可能性に応じたモダリティの選択—視覚・聴覚・触覚の3種類の伝達手段を通して—			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
臨床発達心理実践研究	有	第 10 巻 第 1 号	2015 年	pp. 59-67.

著者名	論文標題			
* II P-6 大石幸二	自閉症児の表情認知の研究—顔図形と顔写真に対する反応の分析			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
人間関係学研究	有	第 19 巻 第 2 号	2015 年	pp. 37-43

著者名	論文標題			
* II P-7 太田研, 遠藤愛, 大石幸二	幼児の身体イメージ形成に及ぼす能動的触知覚活動の可能性			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
星美学園短期大学研究	無	論叢	2015 年	pp.1-11.

著者名	論文標題			
* II P-8 渡邊孝継, 大石幸二	知的障害を伴う自閉症児における参照的注視に関する研究—カード分類課題における条件性弁別の適用—			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
臨床発達心理実践研究	有	第 9 巻 第 2 号	2014 年	pp.80-87.

著者名	論文標題			
* II P-9 渡邊孝継, 須藤邦彦, 大石幸二	知的障害を伴う自閉症児における他者の視線方向の弁別に関する研究—カード分類課題におけるプロンプト・フェイディング法の適用—			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
発達障害支援システム学研究	有	第 13 巻 第 2 号	2014 年	pp. 51-59.

著者名	論文標題			
* II P-10 大石幸二	動きを表す描画に向けられる臨床心理士の視線—身体運動図式の読み取りと関連する視知覚の分析—			

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
人間関係学研究	有	第 19 巻 第 1 号	2014 年	pp.27-35.

著者名	論文標題			
* II P-11 中内麻美, 大石幸二	幼児の身体の動きへの支援が身体像の描出および行動表出に及ぼす効果			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
臨床発達心理実践研究	有	第 8 巻	2013 年	pp.44-52.

著者名	論文標題			
* II P-12 大石幸二, 成瀬雄一	描画における臨床心理学的効果に関する展望—描画行為に内在する身体的自己拡張感の検討—			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
人間関係学研究	有	第 18 巻 第 2 号	2013 年	pp.51-59.

<学会発表>

発表者名	発表標題		
* II C-1 Inaba, M., Nakamura, R., Imaizumi, T., Onodera, O., Takeda, Y., Kusakami, K., & Haga, S.	Development of interactive educational games about human error for railway personnel (Oral presentation)		
学会名	開催地	発表年月	
Proceedings of the 5th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics: AHFE 2014.	Krakow, Poland.	2014, July.	

発表者名	発表標題		
* II C-2 稲葉緑, 小野寺理, 楠神健, 芳賀繁	思い込みエラー体験型学習プログラムの開発 — 鉄道社員を対象としたヒューマンエラー教育プログラム —		
学会名	開催地	発表年月	
日本人間工学会第 55 回大会講演	神戸国際会議場, 神戸市(兵庫県)	2014 年 6 月	

Ⅲ. チーム3:新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究チーム

<雑誌論文>

著者名	論文標題			
* III P-1 中村秀之	「ヒッチコック的 3D —— 『裏窓』(1954)と『めまい』(1958)における接触と情動」			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
立教映像身体学研究	無	第 4 号	2016 年	(in press)

著者名	論文標題			
* III P-2 中村秀之	映画の全体と無限—ドゥルーズ『シネマ』とリュミエール映画			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
立教映像身体学研究	無	第 3 号	2015 年	pp.52-71.

著者名	論文標題			
* III P-3 中村秀之	『裏窓』再訪——その再帰的な観客性の批判に向けて			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
立教映像身体学研究	有	第 1 号	2013 年	pp.5-24.

著者名	論文標題			
III P-4 細馬宏通	身体的解釈法 : グループホームのカンファレンスにおける介護者間のマルチモーダルな相互行為			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

社会言語科学	有	15(1)	2012年	pp.102-119.
--------	---	-------	-------	-------------

著者名	論文標題			
Ⅲ P-5 細馬宏通	オノマトペの音韻構造とジェスチャーのタイミング分析			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
電子情報通信学会技術研究報告: 信学技報	無	112(176)	2012年	pp. 79-82.

著者名	論文標題			
Ⅲ P-6 細馬宏通	考えを表しあう身体: 会話のなかのジェスチャーと身体動作			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
日本語学	無	31(3)	2012年	pp. 28-38.

<図書>

著者名	出版社		
Ⅲ B-1 前田英樹	講談社		
書名	発行年	総ページ数	
「小津安二郎の喜び」	2016年	320	

著者名	出版社		
Ⅲ B-2 中村秀之	岩波書店		
書名	発行年	総ページ数	
「黒澤明——アメリカとの出会いそこない」 in 栗原彬・吉見俊哉編『敗戦と占領』 (「ひとびとの精神史」第1巻 1940年代)	2015年	333	

著者名	出版社		
Ⅲ B-3 中村秀之	岩波書店		
書名	発行年	総ページ数	
「敗者の身ぶり——ポスト占領期の日本映画」	2014年	336	

著者名	出版社		
Ⅲ B-4 中村秀之	東京大学出版会		
書名	発行年	総ページ数	
「見えるものから見えないものへ——『社会科教材映画大系』と『はえのいない町』(一九五〇年)の映像論」 in 丹羽美之・吉見俊哉編『戦後復興から高度成長へ——民主教育・東京オリンピック・原子力発電』(記録映画アーカイブ2)	2014年	282	

著者名	出版社		
Ⅲ B-5 藤井仁子編, 中村秀之	インスクリプト		
書名	発行年	総ページ数	
「喜劇の到来——森崎東のレジスタンスをめぐる覚書」in『森崎東党宣言!』	2013年	367	

著者名	出版社		
Ⅲ B-6 ミツヨ・ワダ・マルシアーノ編 中村秀之	青弓社		
書名	発行年	総ページ数	
「原水爆, 家長, 嫁——『生きものの記録』(一九五五年)における「私」の自壊」 in『「戦後」日本映画論 一九五〇年代を読む』	2012年	340	

著者名	出版社		
Ⅲ B-7 中村秀之, 土屋由香, 吉見	東京大学出版会		

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

俊哉編			
書名	発行年	総ページ数	
「敗者による敗者のための映像——CIE 映画教育と日本製 CIE 映画について」 in『占領する眼・占領する声 CIE/USIS 映画と VOA ラジオ』	2012 年	377	

著者名	出版社		
Ⅲ B-8 中村秀之, 丹羽美之, 吉見俊哉編	東京大学出版会		
書名	発行年	総ページ数	
「暁にあうまで——「岩波映画」と「眼」の社会的創造」 in『岩波映画の1億フレーム』	2012 年	348	

著者名	出版社		
Ⅲ B-9 木村建哉, 中村秀之, 藤井仁子編	インスクリプト		
書名	発行年	総ページ数	
「生命の切れ端——相米映画における下半身の想像力」 in『甦る相米慎二』	2011 年	433	

<学会発表>

発表者名	発表標題		
Ⅲ C-1 中村秀之	「リュミエールなきシネマ —— ドゥルーズ『シネマ』におけるショット概念の批判的考察」		
学会名	開催地	発表年月	
日本映像学会第 40 回大会	沖縄県立芸術大学, 那覇市(沖縄県)	2014 年 6 月	

発表者名	発表標題		
Ⅲ C-2 細馬宏通, 坊農真弓, 石黒浩, 平田オリザ	「アンドロイドらしさは会話によっていかに組織化されるか。—演劇『三人姉妹』のマルチモーダル分析」		
学会名	開催地	発表年月	
第 67 回人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会(SIG-SLUD)	ニューウェルシティ湯河原, 熱海市(静岡県)	2013 年 2 月	

IV. チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム

<雑誌論文>

著者名	論文標題			
IV P-1 江川隆男	ポスト構造主義におけるニヒリズムの徹底—ドゥルーズの多孔質的判断力論を開く」(in 千葉雅也『動きすぎではいけない—ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』)			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
表象(表象文化学会編, 月曜社)	無	第 09 号	2015 年	pp.282-285.

著者名	論文標題			
IV P-2 宇野邦一	知覚されないが, 知覚されるしかないもの			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
思想(岩波書店)	無	第 1085 号	2014 年	pp.9-21.

著者名	論文標題			
IV P-3 江川隆男	山森裕毅『ドゥルーズの哲学——超越論的経験論の生成と構造』			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
フランス哲学・思想研究(日仏哲学会編)	無	第 19 号	2014 年	pp.218-221.

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

著者名	論文標題			
IV P-4 宇野邦一	時間の〈外〉とタナトス			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
思想(岩波書店)	無	第 1075 号	2014 年	pp.90-102.

著者名	論文標題			
IV P-5 松田正隆	[報告]演劇作品『アンティゴネーへの旅の記録とその上演』の報告書			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
立教映像身体学研究	無	第 1 号	2013 年	pp.95-117.

著者名	論文標題			
IV P-6 宇野邦一	反(生政治学)的考察			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
思想(岩波書店)	無	No.1066	2013 年	pp. 40-57.

著者名	論文標題			
IV P-7 宇野邦一	顔の時間			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
思想(岩波書店)	無	No.1044	2011 年	pp. 39-52.

著者名	論文標題			
IV P-8 加藤千恵	帰土の生命説			
雑誌名	レフェリーの有無	巻	発行年	ページ
陰陽五行のサイエンス思想編京都大学人文科学研究所	無	—	2011 年	pp.113-124.

<図書>

著者名	出版社		
* IV B-1 宇野邦一, 江川隆男, 廣瀬純, 堀千晶, 松田正隆 他	せりか書房		
書名	発行年	総ページ数	
ドゥルーズ, 知覚, イメージ — 映像生態学の生成	2015 年	304	

著者名	出版社		
IV B-2 宇野邦一	みすず書房		
書名	発行年	総ページ数	
「ガタリ, リトルネロ, プルースト」(解説論文) in フェリックス・ガタリ『リトルネロ』(宇野邦一訳)	2014 年	184	

著者名	出版社		
IV B-3 江川隆男	河出書房新社		
書名	発行年	総ページ数	
アンチ・モラリア——〈器官なき身体〉の哲学	2014 年	364	

著者名	出版社		
IV B-4 宇野邦一	みすず書房		
書名	発行年	総ページ数	
吉本隆明 煉獄の作法	2013 年	267	

著者名	出版社		
* IV B-5 宇野邦一, 佐々木正人, ジョスリーヌ・モンブティ	立教大学心理芸術人文学研究所		
書名	発行年	総ページ数	
ブックレット『知覚のエコソフィー——生態心理学とダンスからの提言』	2013 年	76	

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

著者名	出版社		
IV B-6 宇野邦一	以文社		
書名	発行年	総ページ数	
『アメリカ, ヘテロトピア』	2012 年	232	

著者名	出版社		
IV B-7 ジャン・ジュネ著, 宇野邦一 訳	みすず書房		
書名	発行年	総ページ数	
『判決』	2012 年	96	

著者名	出版社		
IV B-8 Kuniichi, Uno	n-1 publications São Paulo, Brazil.		
書名	発行年	総ページ数	
<i>The genesis of an unknown body</i>	2012 年	144	

著者名	出版社		
* IV B-9 宇野邦一	河出書房新社		
書名	発行年	総ページ数	
ドゥルーズ—群れと結晶	2012 年	256	

著者名	出版社		
IV B-10 ヴィクトル・ニジェリスコイ	ロシア語通訳協会・アーバンプロ出版センター		
書名	発行年	総ページ数	
「歌舞伎」(ロシア語) in『東京物語』	2011 年	392	

<学会発表>

発表者名	発表標題	
IV C-1 加藤千恵	『入薬鏡』と煉丹術の原理	
学会名	開催地	発表年月
京都大学人文科学研究所共同研究班「東アジア伝統医療文化の多角的研究」第二回研究会	京都大学人文科学研究所, 京都市(京都府)	2014 年 7 月

発表者名	発表標題	
IV C-2 宇野邦一	"Percept and disjonction"	
学会名	開催地	発表年月
The 2nd International Deleuze Studies in Asia conference	大阪大学, 豊中市(大阪府)	2014 年 6 月

発表者名	発表標題	
IV C-3 宇野邦一	「時間という破局的問い」	
学会名	開催地	発表年月
日本時間学会 第4回大会	立教大学, 新座市(埼玉県)	2012 年 6 月

発表者名	発表標題	
IV C-4 加藤千恵	「道教における養胎の技法」	
学会名	開催地	発表年月
第 1 回 Templeton 東アジアの科学と宗教・国際ワークショップ「東アジア世界の「知」の伝統: 科学と思想, 宗教のあいだ」	ソウル大学校, 奎章閣 韓国学研究院, ソウル市(大韓民国)	2012 年 6 月

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

<研究成果の公開状況> (上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

<既に実施しているもの>

プロジェクト全体

・立教大学現代心理学部附属心理芸術人文学研究所 WEB サイト

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/>

・本研究プロジェクトの概要

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/initiative/project/research/009/>

・本プロジェクト 研究成果報告会

1) 2015 年度研究成果報告会

日時: 2016 年 3 月 7 日(月)

場所: 立教大学新座キャンパス 6 号館・N636 教室(ロフト 2)

内容: 研究チーム 1A・1B・2B・3A・3B・4リーダーより, 研究成果報告

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2016/03/17362/>

2) 公開研究成果報告会: (資料 6 参照)

日時: 2015 年 6 月 6 日(土)

場所: 立教大学新座キャンパス 6 号館・N636 教室(ロフト 2)

内容: <第一部> 研究チーム 1・2・3・4リーダーより, 研究成果報告

<第二部> 研究チーム 3 筒井武文監督作品『自由なファンシ』上映会

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2015/06/16248/>

3) 2013 年度研究成果報告会: (資料 11 参照)

日時: 2014 年 5 月 6 日(火)

場所: 立教大学新座キャンパス 6 号館・N636 教室(ロフト 2)

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/events/info/2014/04/14413/>

4) 2012 年度研究成果報告会: (資料 16 参照)

日時: 2013 年 4 月 30 日(火)

場所: 立教大学新座キャンパス 6 号館・N636 教室(ロフト 2)

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/events/info/2013/04/12567/>

5) 2011 年度研究成果報告会: (資料 21 参照)

日時: 2012 年 2 月 22 日(水)

場所: 立教大学新座キャンパス 6 号館・N636 教室(ロフト 2)

・本プロジェクト 研究成果報告書

1) 2015 年度: 研究報告書の公開 HP: (資料 1 参照)

URL: http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/project/report/_asset/pdf/2015_report.pdf

2) 2014 年度: 研究報告書の公開 HP: (資料 7 参照)

URL: http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/project/report/_asset/pdf/2014_report.pdf

3) 2013 年度: 研究報告書の公開 HP: (資料 10 参照)

URL: http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/project/report/_asset/pdf/2013_report.pdf

4) 2012 年度: 研究報告書の公開 HP: (資料 15 参照)

URL: http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/project/report/_asset/pdf/2012_report.pdf

5) 2011 年度: 研究報告書の公開 HP: (資料 20 参照)

URL: http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/project/report/_asset/pdf/2011_report.pdf

Ⅲ. チーム 3: 新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究チーム

【平成 27 年度】

1) 映画上映および公開シンポジウム「3.11 以後の映像表現」 PART3 (資料 2 参照)

日時: 2016 年 3 月 4 日(金)

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

場所:立教大学新座キャンパス 6 号館・N623 教室(ロフト 1)
 内容:黒沢清監督作『柁』『記憶』、『SHARING』を上映, 講師によるディスカッション
 ゲスト講師:黒沢清氏(映画監督, 東京藝術大学大学院教授), 相田冬二氏(映画批評家)
 コーディネータ・司会:篠崎誠
 主催:立教大学心理芸術人文学研究所, 共催:立教大学現代心理学部
 URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2016/03/17355/>

2) 映画上映および公開シンポジウム「3.11 以後の映像表現」PART2 (資料2参照)

日時:2016 年 2 月 29 日(月)
 場所:立教大学新座キャンパス 6 号館・N623 教室(ロフト 1)
 内容:『SHARING』を上映, 講師によるディスカッション
 ゲスト講師:是枝裕和氏(映画監督, 早稲田大学理工学学術院教授)
 コーディネータ・司会:篠崎誠
 主催:立教大学心理芸術人文学研究所, 共催:立教大学現代心理学部
 URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2016/02/17353/>

3) 映画上映および公開シンポジウム「3.11 以後の映像表現」PART1 (資料2参照)

日時:2016 年 2 月 26 日(金)
 場所:立教大学新座キャンパス 6 号館・N636 教室(ロフト 2)
 内容:深田晃司監督作『さようなら』、『SHARING』を上映, 講師によるディスカッション
 ゲスト講師:想田和弘氏(映画監督), 深田晃司氏(映画監督)
 コーディネータ・司会:篠崎誠
 主催:立教大学心理芸術人文学研究所, 共催:立教大学現代心理学部
 URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2016/02/17345/>

4) 映画上映(万田邦敏監督作品)および公開パネルディスカッション

日時:2015 年 12 月 26 日(土)
 場所:立教大学新座キャンパス 6 号館・N623 教室(ロフト 1)
 内容:『SYNCHRONIZER』を上映, パネルディスカッション
 パネルディスカッション:万田邦敏, 篠崎誠, 筒井武文, 中村秀之, 河野真理江氏(静岡文化芸術大学非常勤講師)
 主催:立教大学心理芸術人文学研究所, 共催:立教大学現代心理学部
 URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2015/12/17107/>

5) 映画上映および公開パネルディスカッション第2回「映像における空間と身体(映画は変身する!)」(資料5参照)

日時:2015 年 6 月 13 日(土)
 場所:立教大学新座キャンパス 6 号館・N623 教室(ロフト 1)
 内容:塚本晋也監督作『ヴィタール』他を上映, 講師によるディスカッション
 ゲスト講師:João Pedro Rodrigues(ジョアン・ペドロ・ロドリゲス)氏(映画作家), João Rui Guerra da Mata(ジョアン・ルイ・ゲラ・ダ・マタ)氏(映画作家), 塚本晋也氏(映画作家)
 コーディネータ・司会:篠崎誠
 主催:立教大学心理芸術人文学研究所, 共催:立教大学現代心理学部, 協力:ポルトガル大使館
 URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/events/info/2015/05/16276/>

6) 映画上映および公開パネルディスカッション第1回「映像における空間と身体(映画は変身する!)」(資料5参照)

日時:2015 年 6 月 7 日(日)
 場所:新座キャンパス 6 号館・N623 教室(ロフト 1)
 内容:『SHARING』と『自由なファンシ』を上映, 講師によるディスカッション
 ゲスト講師:João Pedro Rodrigues(ジョアン・ペドロ・ロドリゲス)氏(映画作家), João Rui Guerra da Mata(ジョアン・ルイ・ゲラ・ダ・マタ)氏(映画作家), 赤坂大輔氏(映画批評家), 筒井武文
 コーディネータ・司会:篠崎誠
 主催:立教大学心理芸術人文学研究所, 共催:立教大学現代心理学部, 協力:ポルトガル大使館
 記録:録音 CD 有

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/events/info/2015/05/16276/>

【平成 26 年度】

1) 公開講演会「ヒッチコック映画の空間と精神——ロメール & シャブロール『ヒッチコック』をうけて」(資料8参照)

日時: 2015 年 1 月 10 日(土)

場所: 立教大学新座キャンパス 6 号館・N636 教室(ロフト 2)

ゲスト講師(講演): 木村建哉氏(成城大学准教授)「『ヒッチコック』解説」, 中村秀之「ヒッチコック的 3D——『裏窓』における恐怖と悦楽の彼岸」

パネルディスカッション: 筒井武文, 万田邦敏, 篠崎誠, 木村建哉氏(成城大学准教授), 中村秀之

主催: 立教大学心理芸術人文学研究所, 共催: 立教大学現代心理学部, 協力: éditions azert

記録: 録音 CD 有

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/events/info/2014/12/15561/>

2) 『SHARING』上映(平成 25 年度, 本プロジェクトによる制作作品), 篠崎誠

- ・ロッテルダム国際映画祭にて上映。(2016 年 2 月, オランダ)
- ・Casa Asia Film Week にて上映。(2015 年 11 月, スペイン)
- ・同志社大学・寒梅館ハーディホールにて上映。(2015 年 10 月, 京都府)
- ・長野・松本シネマセレクト主催の上映会にて上映。(2015 年 10 月, 長野県)
- ・サンセバスチャン国際映画祭にて上映。(2015 年 9 月, スペイン)
- ・NIPPON CONNECTION にて上映。(2015 年 6 月, ドイツ)
- ・ファジール国際映画祭にて上映。(2015 年 4 月, イラン)
- ・福井映画祭クロージングにて上映。(2015 年 3 月, 福井県)
- ・TOKYO FILMeX にて上映。(2014 年 11 月, 東京都)
- ・釜山国際映画祭にて上映。(2014 年 10 月, 韓国)
- ・バンクーバー国際映画祭にて上映。(2014 年 10 月, カナダ)

【平成 24 年度】

1) 公開研究会+参考上映「三次元の平面—エヴゲーニィ・パウエルの奥行き演出—」

日時: 2012 年 12 月 15 日(土)

場所: 立教大学新座キャンパス 6 号館・N636 教室(ロフト 2)

ゲスト講師: 小川佐和子氏(日本学術振興会特別研究員[PD], チューリッヒ大学客員研究員), 井上徹氏(映画史・ユーラシア文化研究者, エイゼンシュテイン・シネクラブ[日本]副代表)

主催: 立教大学心理芸術人文学研究所, 共催: 立教大学現代心理学部

記録: 録音 CD 有

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2012/12/11894/>

【平成 23 年度】

1) 公開研究会「映画の第四次元—溝口健二と「深さ」—」

日時: 2011 年 12 月 3 日(土)

場所: 立教大学新座キャンパス 6 号館・8 階会議室

ゲスト講師: 木下千花氏(静岡文化芸術大学文化政策学部芸術文化学科講師・映画理論, シカゴ大学 Ph.D 溝口健二研究)

主催: 立教大学心理芸術人文学研究所, 共催: 立教大学現代心理学部

記録: 録音 CD 有

IV. チーム4: 新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム

【平成 27 年度】

1) 公開演劇祭: 『Dialog / Dance / Diary 身体とイメージをめぐる演劇祭 in 立教』(資料3参照)

日時: 2015 年 12 月 5 日(土)

場所: 立教大学新座キャンパス 6 号館・N623 教室(ロフト 1)・N636 教室(ロフト 2)・スタジオ棟

内容: 『バベル』(映像+朗読)上演: 高山明主催

・『言語の霧』(ダンス)上演: チョン・ヨンドウ主催

・『ジャンヌの声』(映像)上演: 松田正隆主催

・上記作品のアーティスト・主催者によるトークセッション

主催: 立教大学心理芸術人文学研究所, 共催: 立教大学現代心理学部

参加者: 200 名

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2015/12/17002/>

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

2) 公開パネルディスカッション第3回 「映像の中の身体ーダンスと映画ー」(資料4参照)

日時: 2015年6月27日(土)

場所: 立教大学新座キャンパス 6号館・N636教室(ロフト2)

ゲスト: 濱口竜介監督, 砂連尾理氏(ダンサー)

司会進行: 松田正隆

内容: <第一部> 上映会: 『不気味なものの肌に触れる』(2013年濱口竜介監督作品, 54分)

<第二部> 濱口竜介監督作『Dance with OJ』を上映後, 濱口竜介監督, 砂連尾理氏(出演者)とディスカッション

主催: 立教大学心理芸術人文学研究所, 共催: 立教大学現代心理学部

記録: 録音 CD 有

参加者: 50名

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/events/info/2015/06/16349/>

【平成 26 年度】

1) 公開ワークショップとシンポジウム『アルバイト・マッピング～労働を考える』に向けた中間発表(資料9参照)

日時: 2015年1月10日(土)

場所: 立教大学新座キャンパス 6号館・N623教室(ロフト1)

内容: <第一部> 「ワークショップ」上演: 高山明主催

<第二部> シンポジウム: チーム4研究メンバ(高山明, 宇野邦一, 松田正隆, チョン・ヨンドウ)

主催: 立教大学心理芸術人文学研究所, 共催: 立教大学現代心理学部

参加者: 50名

記録: 録音 CD 有

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/events/info/2014/12/15564/>

【平成 25 年度】

1) 公開国際シンポジウム『知覚のプラトー』(資料12参照)

日時: <第一回> 2013年12月14日(土), 15日(日)

<第二回> 2013年12月27日(金), 28日(土)

場所: 立教大学新座キャンパス 6号館・N623教室(ロフト1)・N636教室(ロフト2)

内容: 講演及びパネルディスカッサント

<第一回>

Laura・U・Marks(ローラ・U・マークス)氏(Simon Fraser University 教授), 河合政之氏(映像作家), Peter = Pal・Pelbart(ペーター=パル・ペルバル)氏(サンパウロ・カトリック大学教授), 田中泯氏(舞踊家), 田崎英明

<第二回>

Peter = Pal・Pelbart(ペーター=パル・ペルバル)氏(サンパウロ・カトリック大学教授), Brian・Masumi(ブライアン・マスミ)氏(モントリオール大学教授), 諏訪敦彦氏(映画監督), Girogio・Passerone(ジョルジョ・パセローネ)氏(リール大学教授), 江川隆男氏(首都大学東京助教), 香山リカ

総合司会(第一回・第二回): 宇野邦一

主催: 立教大学心理芸術人文学研究所, 共催: 立教大学現代心理学部

参加者: 100名

記録: 録画 DVD, 録音 CD 有

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RIARPAH/events/info/2013/11/13619/>

2) 公開上演会&トーク『音響ドラマ「横断の調べ: 福島の海岸へ釣りに行った男」及び「Public Address/パブリックアドレス」』(資料13参照)

日時: 2013年7月13日(土)

場所: 立教大学新座キャンパス 6号館・N623教室(ロフト1)

ゲスト講師: 荒木優光氏(音響家)

主催: 立教大学心理芸術人文学研究所, 共催: 立教大学現代心理学部

記録: 録音 CD 有

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2013/07/12868/>

3) 公開講演会と対話: 「マギー・マランと現代ダンスの冒険」(資料14参照)

日時: 2013年6月11日(火)

場所: 立教大学新座キャンパス 6号館・N636教室(ロフト2)

ゲスト講師: Jean Marc Adolphe(ジャン・マルク・アドルフ)氏

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

主催:立教大学心理芸術人文学研究所, 共催:立教大学現代心理学部

参加者:50名

記録:録音 CD 有

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2013/06/12671/>

【平成 24 年度】

1)公開シンポジウム:『ドゥルーズ・知覚・身体』(資料 17 参照)

日時:2012年12月22日(土)

場所:立教大学新座キャンパス 6号館・N636 教室(ロフト 2)

ゲスト講師:廣瀬純氏(龍谷大学准教授), 江川隆男氏(哲学者, 首都大学東京助教), 佐々木中氏(作家, 哲学者, 法政大学非常勤講師), 松本潤一郎氏(立教大学兼任講師), 堀千晶氏(早稲田大学非常勤講師)

参加者:110名

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2012/12/11930/>

2)公開講演会と対話:『知覚・身体・アート —映像生態学への提言』(資料 18 参照)

日時:2012年11月27日(火)

場所:立教大学新座キャンパス 6号館・N636 教室(ロフト 2)

ゲスト講師:佐々木正人氏(東京大学教授)

主催:立教大学心理芸術人文学研究所, 共催:立教大学現代心理学部

参加者:70名

記録:録音 CD,ブックレット『知覚のエコソフィー—生態心理学とダンスからの提言』に再録。

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2012/11/11792/>

3)公開上演会&トーク『病める舞姫』&『踊る身体の方行方』(資料 19 参照)

日時:2012年6月16日(土)

場所:立教大学新座キャンパス 6号館・N623 教室(ロフト 1)

ゲスト講師:Jocelyne Montpetit(ジョスリーヌ・モンブティ)氏(舞踏ダンサー), 曾我傑氏(照明家)(舞台芸術, 演出家)

参加者:70名

記録:録画 DVD,ブックレット『知覚のエコソフィー—生態心理学とダンスからの提言』に再録。

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2012/06/10823/>

【平成 23 年度】

1)公開講演会及びワークショップ『ダンスとデジタル映像を通じて未知の身体を探求する』(資料 22 参照)

日時:2012年1月10日(火)

場所:立教大学新座キャンパス 6号館・N623 教室(ロフト 1)

ゲスト講師:Koosil-ja Hwang(クシルジャ・ホアン)氏(ダンサー), Geoff Matters(ジェフ・マターズ)氏(音楽家, メディア・アーティスト)

参加者:40名

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2012/01/10190/>

2)公開講演上映会『ビデオ映像の哲学』(資料 23 参照)

日時:2011年10月18日(火)

場所:立教大学新座キャンパス 6号館・N636 教室(ロフト 2)

ゲスト講師:Maurizio Lazzarato(マウリッツィオ・ラッツアラート)氏(社会学者, 哲学者), Angela Melitopoulos(アンジェラ・メリトプーロス)氏(映像作家)

参加者:40名

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/events/2011/10/9721/>

<これから実施する予定のもの>

該当なし。

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

14 その他の研究成果等

I. チーム1: 新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究チーム

<実験 Experiments>

I E-1 佐藤一彦, 石山智弘:「4Kカメラを用いた浮世絵の摺りについての撮影実験」

実施日:2016年1月30日(土), 31日(日)

撮影場所:東京都文京区水道橋・株式会社高橋工房二階

内容:4Kカメラがどのように浮世絵の摺りを捉えるかの実験。

撮影機材:ソニー製 3D プロセッサーMPE200 内蔵 2D//3D コンバーターソフトウェア, MPES2D3D1, 3D 映示にパナソニック製 3D テレビを使用。ソニー4Kカメラ・F55。レンズ:独・ツアイス社製コンパクトズームレンズ(70-200ミリ, T2.9), 単焦点レンズ(15ミリ)を使用。

I E-2 佐藤一彦, 石山智弘:「4Kカメラを用いた都内風景の撮影実験」

実施日:2016年1月29日(金)

撮影場所:東京都・浅草寺、仲見世商店街、向島、京橋など

内容:4Kカメラがどのように都内風景を捉えるかの実験。

撮影機材:ソニー4Kカメラ・F55, レンズ:独・ツアイス社製コンパクトズームレンズ(70-200 ミリ, T2.9), 単焦点レンズ(15ミリ)を使用。

I E-3 佐藤一彦, 石山智弘:「4Kカメラを用いた古民家での浮世絵の見え方の撮影実験」

実施日:2016年1月27日(水)

撮影場所:茨城県常総市・古民家「坂野家」

内容:4Kカメラがどのように古民家での浮世絵を捉えるかの実験。

撮影機材:ソニー4Kカメラ・F55, レンズ:独・ツアイス社製コンパクトズームレンズ(70-200 ミリ, T2.9), 単焦点レンズ(15ミリ)を使用。

I E-4 佐藤一彦, 石山智弘:「4Kカメラを用いた浮世絵の絵の具についての撮影実験」

実施日:2016年1月25日(月)

撮影場所:茨城県ひたち那賀市・青木芳昭氏宅(ギャラリー・プラトニカ)

内容:4Kカメラがどのように浮世絵の絵の具の色彩を捉えるかの実験。

撮影機材:ソニー4Kカメラ・F55, レンズ:独・ツアイス社製コンパクトズームレンズ(70-200 ミリ, T2.9), 単焦点レンズ(15ミリ)を使用。

I E-5 佐藤一彦, 石山智弘:「4Kカメラを用いた浮世絵の作品の撮影実験」

実施日:2016年1月22日(金), 23日(土)

撮影場所:立教大学新座キャンパス・スタジオ棟

内容:4Kカメラがどのように浮世絵を捉えるかの実験。

撮影機材:ソニー4Kカメラ・F55, レンズ:独・ツアイス社製コンパクトズームレンズ(70-200 ミリ, T2.9), 単焦点レンズ(15ミリ)を使用。

I E-6 佐藤一彦, 石山智弘:「4Kカメラを用いた東京近郊の紅葉の撮影実験」

実施日:2015年12月2日(水), 4日(金)

撮影場所:千葉縣市川市・弘法寺, 墨田区・秋葉神社, 北区・滝野川, 文京区・小石川後楽園

内容:4Kカメラがどのように東京近郊の紅葉を捉えるかの実験。

撮影機材:ソニー4Kカメラ・F55, レンズ:独・ツアイス社製コンパクトズームレンズ(70-200 ミリ, T2.9), 単焦点レンズ(15ミリ)を使用。

I E-7 佐藤一彦, 石山智弘:「4Kカメラを用いた「雨が激しく降る」風景の撮影実験」

実施日:2014年11月1日(土)

撮影場所:東京都中央区新大橋そば

内容:雨の「降り脚」を明確に撮影するための実験。(天気予報で豪雨の日を選択。ビルの屋上から撮影。)

撮影機材:カメラ(ソニー4K カメラ・F55), レンズ(独・ツアイス社製コンパクトズームレンズ(70-200 ミリ, T2.9)), 単焦点レンズ(20ミリ, 40ミリ)を使用。

I E-8 佐藤一彦, 石山智弘:「4Kカメラを用いた浮世絵の復刻版製作風景の撮影実験」

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

実施日:2014年10月9日(木),10日(金)
 撮影場所:浮世絵の制作工房がある茨城県常総市
 内容:浮世絵の復刻作業をおこなう職人さんたちの手もとの手業の撮影。
 撮影機材:カメラ(ソニー4Kカメラ・F55),レンズ(独・ツアイス社製コンパクトズームレンズ(70-200ミリ, T2.9)),同 単焦点レンズ(20ミリ,40ミリ)を使用。

I E-9 佐藤一彦, 石山智弘:「4Kカメラを用いた隅田川花火大会の撮影実験」

実施日:2014年7月20日(日)
 撮影場所:東京・隅田川流域(白髭橋など)
 内容:花火を4K60コマで捉えるための実験。
 撮影機材:カメラ(ソニー4Kカメラ・F55),レンズ(独・ツアイス社製コンパクトズームレンズ(70-200ミリ, T2.9)),同単焦点レンズ(20ミリ,40ミリ)を使用。

I E-10 佐藤一彦, 石山智弘:「簡易型4Kカメラを用いた撮影実験・東京隅田川周辺」

実施日:2014年5月10日(土)
 撮影場所:東京・隅田川流域(晴海,永代橋,佃島など)
 内容:低価格で簡易型の4Kカメラがどの程度実用に耐えるかの実験。
 撮影機材:カメラ(ソニー製簡易型4Kカメラ・Z100),レンズ(レンズ交換式ではない)を使用。

I E-11 佐藤一彦, 石山智弘:「4K→8Kへのコンバートアップを目的とした撮影実験・桜とチューリップ」

実施日:2014年4月12日(土)
 撮影場所:埼玉県立大宮「花の丘」公園
 内容:4Kで撮影したものを8Kへコンバートアップして実用化することを目的とした撮影実験。
 撮影機材:カメラ(ソニー4Kカメラ・F55),レンズ(独・ツアイス社製コンパクトズームレンズ(70-200ミリ, T2.9)),同 単焦点レンズ(20ミリ,40ミリ),レコーダー(4K非圧縮レコーダーUDR),モニター(シャープ業務用4Kモニター30インチ)を使用。

* I E-12 佐藤一彦, 石山智弘:「4Kハイスピードカメラを用いた高精細高速度撮影の実験」

実施日:2013年3月12日(火)
 撮影場所:立教大学富士見総合グラウンド内馬術部馬場
 内容:障害飛越競技の高速度撮影。
 撮影機材:(株)朋栄社製4Kハイスピードカメラシステム「FT-ONE」を使用。

* I E-13 佐藤一彦, 石山智弘:「2D/3D変換」の実験

実施日:2013年2月15日(金)~3月10日(日)
 場所:立教大学新座キャンパス6号館5階・実験室2
 内容:本研究用ソニー製3Dプロセッサ-MPE200(2D撮影)をデジタル処理で3Dに変換(=2D/3D変換)実用に供せるかの実験。
 検証用映像:2眼式の3Dカメラパナソニック製3DA-1,ソニー製HXR-N3D1Jで撮影,「馬術・障害飛越」,「スタジオでの静物撮影」(3D映像)。2Dはこの3D映像のL側(左眼用)の映像を用いた。
 撮影機材:ソニー製3Dプロセッサ-MPE200内蔵2D//3Dコンバーターソフトウェア,MPES2D3D1,3D映示にパナソニック製3Dテレビを使用。

<撮影映像作品 Moving picture>

I M-1 鈴木清重:『平成23年度-平成27年度 最終成果報告会』(動画作品)

『文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「新しい映像環境をめぐる映像生態学研究の基盤形成」』(立教大学心理芸術人文学研究所,2015年6月6日)

撮影:鈴木清重

実施日:2015年6月6日(土)

撮影場所:立教大学新座キャンパス

主催:立教大学現代心理学部映像身体学科

I M-2 佐藤一彦・石山智弘:4K放送番組「4Kでよみがえる浮世絵《歌川広重『名所江戸百景』》

製作:立教大学現代心理学部,心理芸術人文学研究所

企画・プロデュース・演出・構成:佐藤一彦

放送局:チャンネル4K(124/128度CSデジタル放送=チャンネル番号:502)

放送主体:NexTV-F(一般社団法人・次世代放送推進フォーラム)

放送期間:2015年3月~2016年3月(NexTV-Fの編成結果によるので未定の部分あり)

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

I M-3 鈴木清重, 石山智弘:「João Pedro Rodrigues(ジョアン・ペドロ・ロドリゲス)氏(映画作家), João Rui Guerra da Mata(ジョアン・ルイ・ゲアラ・ダ・マタ)氏(映画作家), 大寺眞輔氏, 篠崎誠監督 上映会トーク(HD 記録動画像)」
 撮影:鈴木清重, 録音:石山智弘
 実施日:2013年3月26日(火)
 撮影場所:立教大学新座キャンパス
 主催:立教大学現代心理学部映像身体学科

* I M-4 鈴木清重:『金環日食と雲』(HD 供覧動画像作品)
 第46回知覚コロキウム デモセッション(明星大学, 東京都青梅市 2013年3月)

I M-5 佐藤一彦, 石山智弘:「JVC ケンウッド社が新規開発をした小型 4K カメラによるテスト撮影」(企業との連携発表)JVC ケンウッド社主催『第4回 映像活用セミナー』
 「4K 高精細映像の可能性を考える」
 実施日:2012年11月10日(土)
 場所:JVC ケンウッド本社内 4K シアター(横浜市神奈川区)
 内容:4K の学術, 教育分野への利活用の可能性を考える, セミナー。
 撮影機材:JVC ケンウッド社製プロジェクター, 及び東芝製 55 インチ 4K テレビモニターを使用。再生機には, 立教大学所有のNTT製 4K サーバを使用。
 講師:佐藤一彦

* I M-6 佐藤一彦, 石山智弘:「小型 4K カメラによる屋外撮影」その3
 実施日:2012年11月3日(土)
 撮影場所:東京都立川市・昭和祈念公園のコスモス畑
 内容:4K による紀行番組を想定して撮影。
 撮影機材:JVC ケンウッド社製 JVC/GY-HMQ10 を使用。

* I M-7 佐藤一彦, 石山智弘:「小型4Kカメラ JVC/HMQ10 による屋外撮影」その2
 実施日:2012年8月26日(日)
 撮影場所:神奈川県座間市・特設ヒマワリ畑
 内容:4K による紀行番組を想定して撮影。
 撮影機材:JVC ケンウッド社製 JVC/GY-HMQ10 を使用。

* I M-8 佐藤一彦, 石山智弘:「JVC ケンウッド社が新規開発をした小型 4K カメラによるテスト撮影 小型 4K カメラ JVC/GY-HMQ10 による屋外撮影」その1
 実施日:2012年8月23日(木), 24日(金)
 撮影場所:長野県木曾・赤沢自然休養林(森林鉄道), 同, 御嶽山山麓, 木曾福島(木曾町)旧宿場町
 内容:4K による紀行番組を想定して撮影。
 撮影機材:JVC ケンウッド社製 JVC/GY-HMQ10 を使用。

I M-9 鈴木清重:『アニメーションと実写動画像の境界を考察する動画像作品の供覧』(DVD-Video)
 日本アニメーション学会第14回大会(東海大学, 札幌市 2012年7月)

* I M-10 佐藤一彦, 石山智弘:「超高精細4K映像による風景撮影＝＜東京散歩＞」
 作品タイトル:東京散歩
 撮影日:2012年1月25日(水), 26日(木)
 撮影場所:都内隅田川各所, 浅草, 丸の内イルミネーション
 撮影機材:米国製4Kカメラ RED ONE, ツアイス社製「コンパクトプライムレンズ」1セットを使用。
 使用モデル:大瀬楓(現代心理学部映像身体学科2年次生)

* I M-11 佐藤一彦, 石山智弘:「アメリカンフットボール」篇
 撮影日:2011年11月13日(日)
 撮影場所:アミノ・バイタル・フットボール・フィールド(調布市)
 撮影内容:東京六大学野球・関東大学一部リーグ公式戦「立教大学対拓殖大学」。
 撮影機材:パナソニック製2眼式 3D カメラなど3台を使用。

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

* I M-12 佐藤一彦, 石山智弘:「舞踏を被写体とする 3D 動画像」

撮影日:2011年11月1日(火)
 撮影場所:立教大学新座キャンパス内撮影スタジオ
 撮影内容:土方翼の舞踏譜(演者:舞踏家・和栗由起夫氏)。
 撮影機材:パナソニック製 3D カメラ1台を使用。

* I M-13 佐藤一彦, 石山智弘:スポーツ競技を被写体とする 3D 動画像「硬式野球」篇

撮影日:2011年10月15日(土)
 撮影場所:明治神宮野球場
 撮影内容:東京六大学野球・秋のリーグ戦「立教大学対慶應義塾大学」1回戦。
 撮影機材:パナソニック製2眼式 3D カメラなど4台を使用。

<公開イベント Events>

I EV-1 佐藤一彦:セミナー『4K 徳島映画祭「チャンネル4K での体験から見た 4K 放送番組の制作における課題とハードル」』

日時:2015年12月10日(木)
 場所:徳島県名西郡神山町神山コンプレックス

I EV-2 佐藤一彦・石山智弘:セミナー『4K OlymPac「浮世絵《歌川広重『名所江戸百景』》, 4K 制作と色再現の考察」

日時:2015年7月4日(土)
 場所:デジタルハリウッド大学(東京都, 千代田区)
 主催:雑誌『ニューメディア』主催

I EV-3 鈴木清重(ゲスト・講師):イベント「デザイナーのあたまの中展—デザインの試行錯誤を「ビジュアル化」する—イベント3「デザイナーのあたまの中」を体験する！」

日時:2015年2月8日(日)
 場所:クリエイティブスペース amu(東京都, 渋谷区)
 司会・講師:川崎紀弘, 記録:山本泰子, 小林美子
 主催:株式会社コンセント, クリエイティブスペース amu.

I EV-4 鈴木清重(招聘講義):「心理学研究からみるデザイン学の課題:モノ志向からコト志向へ」

日時:2014年11月1日(土)
 場所:専門学校 桑沢デザイン研究所

I EV-5 佐藤一彦, 石山智弘:シンポジウム及びセミナー「ケーブルテレビ局のための4K実技研修と経営フォーラム」

日時:2014年9月11日(木), 12日(金)
 場所:立教大学新座キャンパス 6号館 N623 教室(ロフト 1), 636 教室(ロフト 2), スタジオ棟
 内容:講演と実技指導:「4K での撮影と編集の実施方法」(石山智弘)
 講演:「ケーブルテレビがめざすべき 4K ビジネス戦略」(佐藤一彦)
 主催:日本ケーブルテレビ連盟, 立教大学現代心理学部映像身体学科

I EV-6 佐藤一彦, 石山智弘:講演発表「初期 4K への挑戦を振り返る」

日時:2014年3月17日(月)
 場所:デジタルハリウッド大学駿河台ホール
 主催:雑誌『ニューメディア』主催

I EV-7 佐藤一彦, 石山智弘:InterBEE(国際放送機器展)2013 での映像コンテンツ公開

計測技術研究所ブースでの超解像回路を用いた 4K→8K コンバートアップの試作例公開映示
 日時:2013年11月13日(水)~15日(金)
 場所:幕張メッセ

I EV-8 佐藤一彦:全国 4K 祭り講演発表:「4K 入門」

日時:2013年9月27日(金)
 場所:徳島県神山町・寄井座
 主催:雑誌『ニューメディア』主催

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

I EV-9 佐藤一彦:講演発表:「4K /UHD とサイネージ」
デジタルサイネージ・コンソーシアム主催・4K勉強会
日時:2013年8月6日(火)
場所:三菱総合研究所・会議室

I EV-10 佐藤一彦(講演発表):「放送番組としての4K映像制作～CX4K放送の開始を来年度にひかえて～」全日本テレビ製作社連盟+クリエイターズ・プラス主催・特別セミナー「4K時代きたる!次世代テレビの本命“4Kテレビ”の徹底研究」
日時:2013年7月16日(火)
場所:毎日新聞社内マイナビホール

I EV-11 佐藤一彦(講演発表):「4K放送実用化へ向けた制作者からの視点」
デジタルシネマ・コンソーシアム主催・シンポジウム2013「映像革新・4Kの世界から見える最新技術とそのビジネスに与えるインパクト」
日時:2013年5月22日(水)
場所:慶應義塾大学三田キャンパス

I EV-12 鈴木清重:「かすかな光へ」上映会
日時:2012年6月10日(日)
場所:立教大学新座キャンパス6号館・N636教室(ロフト2)
主催:新座実行委員会, 心理芸術人文学研究所(共催, 世話人:鈴木清重)

Ⅲ. チーム3:新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究チーム

<映画作品 Film>

*Ⅲ F-1 万田邦敏:長編劇映画『SYNCHRONIZER』(2015年12月, 上映時間83分, カラー)
制作プロダクション:アルタミラピクチャーズ

*Ⅲ F-2 筒井武文:長編劇映画『自由なファンシイ』(2015年3月, 上映時間115分, カラー HD 1:1.85 5.1)
制作プロダクション:アルタミラピクチャーズ

*Ⅲ F-3 篠崎誠:長編劇映画『SHARING』(2014年3月, 上映時間99分)
制作プロダクション:オフィス北野

<その他論文・資料 Documentations & detas>

*Ⅲ D-1 筒井武文, 万田邦敏, 篠崎誠, 木村建哉, 中村秀之:(討議の記録)「ヒッチコック的形式の帰趨」, 『立教 映像身体学研究』3号, 2015年3月, pp.73-93.

*Ⅲ D-2 河野真理江, 中村秀之:『映画の奥行きにかんする研究 注釈付文献リスト』研究用資料, 立教大学心理芸術人文学研究所, 2013年3月, 総頁数24.

*Ⅲ D-3 万田邦敏, 西山洋市, 大工原正樹:(討議の記録)「『J・エドガー』という謎なき謎——イーストウッドと映画の現在」, 『立教映像身体学研究』第1号, 2013年3月, pp.69-94.

Ⅲ D-4 細馬宏通:(雑誌記事)「奥行き of 魔術 絵はがきとパノラマ」, 『東京人』28(1), 2013年1月, pp.74-79.

Ⅲ D-5 細馬宏通:(雑誌記事)「浅草十二階の明治」, 『東京人』27(6), 2012年5月, pp.60-65.

Ⅲ D-6 中村秀之:「光のなかの闇のなかの光」, 第4回恵比寿映像祭『映像のフィジカル』カタログ, 東京都写真美術館, 2012年, pp.30-33.

英訳, “Light within the Dark within the Light,” 同誌, pp.34-37. 査読なし。

(Website「恵比寿映像祭」の「Yebizo フォーラム」でも公開。)

URL: http://www.yebizo.com/jp/forum/forum_index.html

Ⅳ. チーム4:新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究チーム

<公開イベント Events>

IV EV-1 江川隆男:合評会『アンチ・モラリア——〈器官なき身体〉の哲学』合評会

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

日時:2014年11月30日(日)
 場所:グランフロント大阪
 特定質問者:千葉雅也氏(立命館大学准教授)

<演劇・舞台 Theater>

IV T-1 松田正隆:研究ワークショップ, 上演会「長崎を上演する」4(作・演出 松田正隆)

日時:2015年3月28日(土), 29日(日)
 場所:立教大学新座キャンパス 6号館・N623 教室(ロフト1)
 アフタートークゲスト(29日):松井周氏(サンプル主宰)

IV T-2 松田正隆:研究ワークショップ, 上演会:「長崎を上演する」3(作・演出 松田正隆)

日時:2014年8月31日(日)
 場所:立教大学新座キャンパス スタジオ棟
 アフタートークゲスト:平田栄一朗氏(慶応義塾大学教授/演劇学・ドイツ演劇)

IV T-3 松田正隆:『アンティゴネーへの旅の記録とその上演』

第一の上演『アンティゴネーへの旅の記録とその上演』
 公演日時:2012年11月15日(木)~18日(日), 上演時間:7時間
 場所:にしすがも創造舎
 協力:青木セイ子, 小畑瓊子, 上村 梓, 栗原弓枝, 株式会社 POP, 魚灯, 福島県立盲学校, 遊園地再生事業団, 制作:マレビトの会, 一般社団法人 torindo
 共同制作:フェスティバル/トーキョー, 助成:芸術文化振興基金, 公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団, 主催:フェスティバル/トーキョー, マレビトの会
 特設サイト: <http://www.marebito.org/antigone/>

IV T-4 松田正隆:音響作品『横断の調べ:福島の海岸へ釣りに行った男』

公演日時:2012年11月15日(木)~18日(日), 上演時間:70分程度
 場所:にしすがも創造舎 校舎3階(教室および廊下)
 音響/構成/演出:荒木優光, 照明:筆谷亮也, 音響:齋藤 学, 音響オペレート:椎名晃嗣, 舞台監督:寅川英司+鴉屋, 田中 翼, 宣伝写真:笹岡啓子, ドキュメント・ウェブデザイン:中山佐代, ドキュメントレイアウト:酒井一馬, 舞台写真・映像記録:西野正将, 田村友一郎, 制作:新保奈未, 中山佐代, 森真理子, 吉田雄一郎
 協力:青木セイ子, 小畑瓊子, 上村 梓, 栗原弓枝, 株式会社 POP, 魚灯, 福島県立盲学校, 遊園地再生事業団
 制作:マレビトの会, 一般社団法人 torindo, 共同制作:フェスティバル/トーキョー
 助成:芸術文化振興基金, 公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団
 主催:フェスティバル/トーキョー, マレビトの会

IV T-5 松田正隆:音響作品『横断の調べ:煙にまかれたジュークボックス』

公演日時:2012年11月15日(木)~18日(日), 上演時間:60分程度
 場所:にしすがも創造舎 校舎3階(教室および廊下), 校舎地下1階
 音響構成/演出:荒木優光, 照明:筆谷亮也, 音響:齋藤 学, 音響オペレート:椎名晃嗣, 舞台監督:寅川英司+鴉屋, 田中 翼, 宣伝写真:笹岡啓子, ドキュメント・ウェブデザイン:中山佐代, ドキュメントレイアウト:酒井一馬, 舞台写真・映像記録:西野正将, 田村友一郎, 制作:新保奈未, 中山佐代, 森真理子, 吉田雄一郎
 協力:青木セイ子, 小畑瓊子, 上村 梓, 栗原弓枝, 株式会社 POP, 魚灯, 福島県立盲学校, 遊園地再生事業団
 制作:マレビトの会, 一般社団法人 torindo, 共同制作:フェスティバル/トーキョー
 助成:芸術文化振興基金, 公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団
 主催:フェスティバル/トーキョー, マレビトの会

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

<「選定時」に付された留意事項>

該当なし。

<「選定時」に付された留意事項への対応>

該当なし。

<「中間評価時」に付された留意事項>

該当なし。

<「中間評価時」に付された留意事項への対応>

該当なし。

法人番号	131095
プロジェクト番号	S1191010

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳						備 考
		法 人 負 担	私 学 助 成	共同研 究機関 負担	受託 研究等	寄付金	その他()	
平成 2 3 年度	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	0	0	0	0	0	0	0
	研究費	19,049	9,498	9,551	0	0	0	0
平成 2 4 年度	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	0	0	0	0	0	0	0
	研究費	13,063	4,773	8,290	0	0	0	0
平成 2 5 年度	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	0	0	0	0	0	0	0
	研究費	24,086	11,910	12,176	0	0	0	0
平成 2 6 年度	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	0	0	0	0	0	0	0
	研究費	19,389	11,995	7,394	0	0	0	0
平成 2 7 年度	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	0	0	0	0	0	0	0
	研究費	21,153	11,333	9,820	0	0	0	0
総 額	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	0	0	0	0	0	0	0
	研究費	96,740	49,509	47,231	0	0	0	0
総 計	96,740	49,509	47,231	0	0	0	0	

17 施設・装置・設備の整備状況 (私学助成を受けたものはすべて記載してください。)

《施設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)(千円)

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
立教大学新座キャンパス 6号館2・3・5・6・8階	平成17年度	4899m ²	33	405	0	0	—
立教大学新座キャンパ ス・スタジオ棟	平成16年度	211m ²	2	34	0	0	—

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

0 m²

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)

(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型番	台数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)							
(研究設備)							
4K超高精細・上映音響装置	18	HD230スクリーン他	1	95 h	—	—	—
スタジオ棟内・撮影照明設備	18	無し	1	60 h	—	—	—
映像編集・音響整音装置	18	MacPro, Mac G5他	1	315 h	840	—	—
4K撮影カメラ・記録装置一式	20	RED ONE, UDR-5S	1	270 h	—	—	—
色彩輝度計	23	BM-7A ANA	1	250 h	696	—	—
行動観察システム一式	23	BB-HCM715他	1	710 h	2,236	—	—
3D対応24型モニター	23	LMD-2451TD	1	300 h	604	—	—
RedrockMicroシネマセット	23	8-003-0054,EOS5D MKⅢ他	1	100 h	2,265	—	—
Smoke for Mac 一式	23	MacPro, Autodesk Smoke他	1	1500 h	3,791	—	—
3Dプロセッサ 一式	23	MPE-200	1	100 h	4,515	—	—
Cine Alta 4Kカメラ、ビューファインダー	25	PMW-F55,DVF-EL100	1	80 h	2,926	—	—
(情報処理関係設備)							

18 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平成	23	年度	積 算 内 訳	
小 科 目	支 出 額	主 な 使 途		主 な 内 容	
		金 額		金 額	
教 育 研 究 経 費 支 出					
消 耗 品 費	8,792	消耗品費・用品費	8,792	PCおよび周辺機器、ソフトウェア代、メディア代	
光 熱 水 費	0		0		
通 信 運 搬 費	1	郵便費	1	資料・小冊子郵送代	
印 刷 製 本 費	0		0		
旅 費 交 通 費	466	旅費交通費	466	出張調査費、学外分担者旅費、外部講師招聘旅費	
報 酬 ・ 委 託 料	1,587	その他の委託費・報酬手数料	1,587	実験参加者/講師謝金・アルバイト代・外部委託費	
(賃借料)	206	施設設備賃借料	206	機器リース代	
(出版物費)	169	その他の図書資料費	169	図書資料購入費	
(機器備品修繕費保守料)	413	機器備品修繕費保守料	413	機器保守代	
(その他)	16	諸会費・雑費	16	諸会費・雑費	
計	11,650		11,650		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出					
人 件 費 支 出	1,449	プログラム・コーディネーター	1,449	実人数1名(200×6ヶ月×1名、雇用経費)	
(兼務職員)					
教 育 研 究 経 費 支 出	0		0		
計	1,449		1,449		
設 備 関 係 支 出 (1個又は1組の価格が500万円未満のもの)					
教 育 研 究 用 機 器 備 品	5,950		5,950	色彩輝度計、画像編集用メインコンピューター一式、3Dプロセッサ、DSLRシネマセット、24型業務用3D対応液晶モニター	
図 書	0		0		
計	5,950		5,950		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出					
リサーチ・アシスタント	0		0		
ポスト・ドクター	0		0		
研究支援推進経費	0		0		
計	0		0		

年 度	平成 24 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	838	消耗品費・用品費	838
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	14	郵便費	14
印 刷 製 本 費	393	印刷製本費	393
旅 費 交 通 費	344	旅費交通費	344
報 酬 ・ 委 託 料	1,917	その他の委託費・報酬手数料	1,917
(賃借料)	340	施設設備賃借料	340
(出版物費)	93	その他の図書資料費	93
(機器備品修繕費保守料)	0		0
(その他)	26	諸会費・会議会合費	26
計	3,965		3,965
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	3,376	プログラム・コーディネーター	3,376
教育研究経費支出	0		0
計	3,376		3,376
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	1,879		1,879
図 書	0		0
計	1,879		1,879
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	72	研究補助	72
ポスト・ドクター	3,771	研究従事者	3,771
研究支援推進経費	0		0
計	3,843		3,843

年 度	平成 25 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	2,135	消耗品費・用品費	2,135
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	13	郵便費・電信電話費	13
印 刷 製 本 費	85	印刷費	85
旅 費 交 通 費	884	旅費交通費・海外出張費	884
報 酬 ・ 委 託 料	8,763	報酬手数料・その他の委託費	8,763
(賃借料)	672	施設・設備等賃借料	672
(出版物費)	125	その他図書資料費	125
(機器備品修繕費保守料)	158	機器備品修繕費・保守料	158
(その他)	220	諸会費・会議会合費・雑費	220
計	13,055		13,055
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	3,452	プログラム・コーディネーター	3,452
教育研究経費支出	0		0
計	3,452		3,452
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	3,704		3,704
図 書	0		0
計	3,704		3,704
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	21	研究補助	21
ポスト・ドクター	3,854	研究従事者	3,854
研究支援推進経費	0		0
計	3,875		3,875

年 度	平成 26 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	2,069	消耗品費・用品費	2,069
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	0		0
印 刷 製 本 費	1,032	印刷費	1,032
旅 費 交 通 費	477	旅費交通費・海外出張費	477
報 酬 ・ 委 託 料	5,751	報酬手数料・その他の委託費	5,751
(賃借料)	940	施設・設備等賃借料	940
(出版物費)	71	その他図書資料費	71
(機器備品修繕費保守料)	0		0
(その他)	182	諸会費・雑費・損害保険料	182
計	10,522		10,522
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	4,559	教育研究コーディネーター アルバイト(調査補助・研究会運営補助)	4,559
教育研究経費支出	0		0
計	4,559		4,559
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	385		385
図 書	0		0
計	385		385
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	18	研究補助	18
ポスト・ドクター	3,905	研究従事者	3,905
研究支援推進経費	0		0
計	3,923		3,923

年 度	平成 27 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	1,303	消耗品費・用品費	1,303
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	11	郵便費	11
印 刷 製 本 費	937	印刷費	937
旅 費 交 通 費	1,226	旅費交通費・海外出張費	1,226
報 酬 ・ 委 託 料	10,295	報酬手数料・その他の委託費	10,295
(賃借料)	933	施設・設備等賃借料	933
(出版物費)	34	その他図書資料費	34
(機器備品修繕費保守料)	5	機器備品修繕費・保守料	5
(その他)	143	諸会費・雑費・損害保険料	143
計	14,887		14,887
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	5,332	教育研究コーディネーター アルバイト(調査補助・研究会運営補助)	5,332
教育研究経費支出	0		0
計	5,332		5,332
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	934		934
図 書	0		0
計	934		934
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	0		0
ポスト・ドクター	0		0
研究支援推進経費	0		0
計	0		0